互評自註歌集

赤土

山口茂吉著

佐藤佐太郎評

五評自註歌集

赤土

山口茂吉著

（佐藤佳太郎譯）

講談社

昭和二十三年十月二十日　印刷
昭和二十三年十一月一日　發行

定價　二〇〇円

著者　山口茂吉

發行者　東京都文京區音羽町三ノ一九　尾張眞之介

印刷者　東京都千代田區神田錦町三ノ一　井關好彦

印刷所　東京都千代田區神田錦町三ノ一　大同印刷株式會社

發行所　東京都文京區音羽町三ノ一九　株式會社　大日本雄辯會講談社

日本自由出版協會會員

振替口座　東京三九三〇

電話(33)代表　九段一八六六番一三一番

凡例

一、本書は著者の第一歌集赤土に對し、評者が歌集に批評を書入れたものを基として、著者が自註を施したものである。

一、本書では作品を總べて年度別にして編集し、昭和十一年より昭和十五年に及ぶ短歌作品四百三十首を收載した。

一、短歌作品の一連として分量の多いものは翻讀に便ならしめるため各篇毎に番號を附し、適宜に分割した。

一、作品數首乃至十數首の次に段を低くして小活字で示したのが評者の言である。

一、次に九ポイント活字で記述したもの並に〇の中に數字を示し、作品と批評とを對照せしめて記述したものが著者の自註である。

一、本書では鑑賞上の便を思ひ、連作歌篇の順序をも若干正して置いた。

一、互評自註歌集としての本書は、佐藤佐太郎著歌集歩道（批評は赤土の著者がした）と、いはば對をなすものである。

互自歌集註評

赤土目次

昭和十一年

鵠沼……五
嚴冬……九
童馬山房……一一
陽春……一三
富士山上吟……一五
春山北町……二四
折に觸れ……二九
霧積溫泉……三一
冬の海……三四

昭和十二年

三保……四一
久能山……四四
萩原苺園……四六
龍華寺……四七
鐵舟寺……四九
林中……五〇
安房の海……五四
春雷……六二
春一日……六五
木の芽立つ……六七
走井……六九
土用來……七一
强羅……七四
大島……七八

霜枯……八〇

昭和十三年

魚附海岸……八五
きさらぎ……八七
石神井……九〇
犬を悲しむ……九三
茗荷……九六
麥秋……九七
葛飾水源……一〇〇
砂の庭……一〇三
朝霧……一〇五
深大寺附近……一〇八
武藏野小吟……一一〇

昭和十四年

杉原谷村……一一七
霜……一二〇
王攸琴……一二二
春嵐……一二五
松の芽……一二七
可動橋……一二九
草蜉蝣……一三一
物の響き……一三三
七月九日……一三六
晩夏……一三八
左千夫先生墓參……一四〇
箱根山上吟……一四三

神田上水……一四五
野火止……一四八
落葉……一五〇
北の空……一五二
冬田……一五五

昭和十五年

冬靄……一五九
海邊……一六二
冬……一六四
寒靄……一六七
春寒……一六九
早春……一七一
大島……一七四

火口……一七六
ふくろふ……一七八
暗黑……一八一
椎の花……一八五
退け時……一八八
七月……一九一
夏雲……一九三
八月……一九六
新秋……一九九
餘響……二〇一
評後　佐藤佐太郎……二〇三
後記　山口茂吉……二〇四

裝釘　鹿兒島壽藏

赤土

山口茂吉

昭和十一年

鵠沼

1 藤の實の落ちしづみたる庭池は片瀬川より潮差しそめぬ

2 水門の網扉に潮のいきほひて流れ來りし埃吸ひつく

3 林泉山は木高くなりて見えをりし砂丘も今はかくろひにけり

4 片瀬川に沿ひてゆたけき林泉のうち池に夕の潮滿ちたり

5　鵠沼の小松林に聞こゆるは砂吹きたまるかすかなる音

6　庭池にうち靡く藻のありありと過ぎにし人の現し目に見ゆ

7　松原と田居をくぎれる片瀬川の夕づくながれ飽かず見て居り

8　林泉山の高きに立てば川下の水ひとところ光差したり

1　二句までは單なる屬目といふ程度で輕い。勿論下句が眼目ではあるが。

2　下句やや通俗ならん。

3　三四句いくらか的確を欠く。

4　下句巧まずして而も感動がある。

6　「現し目」は細かいところに工夫のある作者の特色が出てゐる。

7　結句がもう一息といふ感じなり。

この「鵠沼」一聯の歌を歌集「赤土」の巻頭に置いたのは、編輯の都合上さういふ順序になつたので偶然ではあるが、鵠沼は私の非常に好きな地でもあり、また、私が始めて歌を作つてアララギに載せてもらつたのも鵠沼の歌であつて、まことに自分に取つてはなつかしい處なのである。この一聯は佐藤君の批評でもあまり出來がよくない事になつてゐるが、自分にはさういふ訣合があつて、稚拙ながらも棄てがたい氣持である。

① 佐藤君の云ふ通りやや輕いかも知れないが、下句が眼目であつて庭の池へ夕潮の差して來るところに感動があるわけである。

② 結句はもう少し何とかしたかつたが、どうにもならなかつたことを想起する。その他、取り立てて自分に云ふところがない。

③ これも自分だけの感動であつて、人を同感せしめることが出來なければ何にもならないが、一二句あたりには自分ひとりの深い感動があつて出來たものである。

④　下句佐藤君が云つてくれた通りでやや自信があるが、一二句あたりは今見るとまだ稚拙の感じが自分でもする。

⑥　この歌佐藤君の批評まことに同情的で有難い。自分ではあまり註を加へずに鑑賞してもらひたい。

嚴冬

1 齋藤茂吉といふ職工の慘死せしかなしき記事が小さく出で居り

2 眞夜なかに平爐熔鋼が流れいでて若き職工の忽ち死しぬ

3 この朝の寒さきびしく濠に張りし氷に低き虹立ちにけり

4 とみに寒くなりてこのごろ部屋に置ける煉炭の火は一日たもたず

5　夜おそく爲事終へつつアルコールふふみし綿を手に揉みて居り

3　佳作。著目がよい。

4　澁る如き歌調が素材の平凡を救つてゐる。

①　自分の先生と同じ名前の、職工をしてゐる人が慘死した新聞記事を見て、ひどく感動してこの歌と次の歌を作つたのである。しかし人はこれをも興味本位とするであらうか。

③　嚴冬の候に朝々丸の内へ通勤の途中、かういふ光景を見ることが稀にあつて一首にまとめたものである。

④　佐藤君の評に盡きてゐて、何等自註を要しないであらう。—

⑤　三句以下はちよつと人に分かりにくいかも知れないと思ふが、これは選歌したり歌稿の整理をしたりした後で消毒のために指先をアルコールで拭くところであつて、それだけの歌であるかも知れない。

童馬山房

1　鉛筆の研屑を君は火にくべてさながら香のごとしと言はす

2　九十二歳のわが祖母の寫眞を君見たまふ涙ぐましくその側に居り

二首とも誠實でいい。

「童馬山房」は云ふまでも無く、齋藤先生の青山南町五丁目八十一番地の御宅の書齋に名づけ

られたものであつて、たとへばそこで選をせられたアララギの選歌を「童馬山房選歌」と云はれた如きその一例である。しかしここに詠んだ童馬山房は昭和二十年五月二十五日夜の空襲で全焼してしまつた。

① 歌の中の「君」は即ち先生のことであつて、先生のお爲事の手傳などしてゐた時に出來たものである。

② 鄕里から祖母の寫眞が屆いたのを先生にお目にかけた時のもので、右と同時の作である。この祖母は長生きして、昭和十五年、九十七歳の秋の彼岸の中日に亡くなつたのである。自分のこころの中には先生にも僕の祖母のやうに長生きしていただきたいと云ふ氣特があるわけである。

陽春

1 子を背負へる埴輪を見れば眞處女の如くまどかなる顔をして居り

2 奈良びとが地に鎭めしいくひらの黃金延板目も離れず見き

3 霜解のしるきさ庭に空俵しき竝べをり妻と女中は

4 馬場先の冬枯芝生は萌えそめてここより見れば斑らに靑し

5　櫻ばな今日のごとくに散りがたの東京にわが來し日偲ばゆ

1　このあたりはまだ觀入が淺いと思ふ。一面は常識的でもある。

5　技巧が自在で樂しい。

①　この歌も次の歌も佐藤君が云つてくれたやうに常識的で感情が淺いかも知れない。

②　結句はたしか子規先生の歌にかういふ句があつたやうに思ふ。

④　これは馬場先門の角の今の明治生命の高層上から宮城前の芝生を廣く見渡した處であつて、結句の「斑らに青し」はさういふ處がいくらか出てゐるであらう。

⑤　私が東京へ始めて上京した日は四月十七日であつて、東京驛から日比谷に出て三宅坂から赤坂見附の方へ歩いたのであるが、その時にあの三宅坂の櫻が散りがたで白く花瓣が散りたまつてゐたその印象が深く、毎年この歌のやうな氣持で追憶するわけである。

富士山上吟

七月三十日土屋文明先生に附し、同令息令弟五味保義の諸氏と富士山上に登り、翌日下山す

1
森林帯いつしか過ぎて石原に照る日きびしき山路となりぬ

2
眼下の樹海のうへを雲の影うつろひ行けるさまぞゆたけき

3
雪なだれの跡いちじるく石楠花の群落はみな下に靡きぬ

4
熔岩のうへ這ひなづみ登り行けば熱きて暑し立てる陽炎

5 痩せて居る吾が身は輕く吹きあぐる風のまにまに上る心地せり

6 のぼり行く道々われは火山彈いくつも見つけぬ裕いで來て

7 岩群より砂より低く燃え立ちてゆらぐ陽炎山を覆へり

8 夕はやき山のやどりに幾たびも小屋をいで入りたのしも吾は

9 群山をこめてしづめる雲のうへに富士の夕影とほく伸びたり

10 山裾の光をふくむ夕雲の明りまばゆく立ちて見てをり

11 狹き室に莫蓙しき二人ならびて寢ぬ肥りし友と痩せをる吾と

12 月讀の沈み果てたる夜半ながら薄明さし山中湖見ゆ

13 息ぐるしく夜半に眼ざめて室の外に出づれば近く星輝けり

14 ひがしより光來りて富士の嶺をあけぼのの空に照らしいだしつ

15 あかときの暗き空より音たてて野分だつ風吹きおろしけり

16 曉の雲平かになり行きて日の差す前のしづかなる色

17 頂を振りさけ見れば岩が根に日は咲み映えて明けちかづきぬ

18 もろひとは日の出づるとき歩みゐし位置にとどまりて光を仰ぐ

19 光さす富士のいただきは物なべて赤く染まれり明くるひとときぬ

20 霧ながら明けゆく山の高原に朝鳥の啼くこゑも聞こえず

21 天ちかき高嶺岩垣くれなゐに朝日さし來ぬ雲を離れて

22 淺谷に卷風たちてしづまりぬ澄みとほりたる光のなかに

23 差しそめし光はいまだなじまねばおのづから赤し嶺の石原

24 朝空にありとしもなき風吹きて歩みをとどめ居れば聞こゆる

25 空高く飛びゐる紙が方向かはりし風にたちまち吹き落されつ

26 富士が根の上にしありて時あたかも淺間の噴火するを見にけり

27 天の門を搖がすごとく重々と淺間の山は煙吐きをり

28 遠下に見ゆる淺間の噴煙はしばらくにして形を變へぬ

29 見る見るうち二たび噴火はじめたる淺間の山はものものしかり、

30 後になり先になりして下り來し家族連れのなかの若きをとめご

31 砂埃たてて走りゆく人あれば吾は追ひ越すときのまにして

一聯はやはり力作である。自由で而も力が充ちてゐる。取材にやや興味的なものも交つてゐるが、たとひさういふものでも實に確かで手堅い。

この「富士山上吟」は赤土の中でも最も長い聯作であつて、前書にもある通り土屋文明先生、令息夏實氏、土屋先生の令弟、五味保義の諸氏と共に登つたのであつて、土屋先生に大變お世話になつた。七月二十九日に吉田口の刑部旅館に一泊して、強力を一人雇ひ、馬返まで自動車で行

つたやうに記憶してゐる。それから勿論徒歩で登つたのである。その頃は私の體の調子も大變よくて、5の歌にある如く「吹きあぐる風のまにまに上る」といふやうな心持がした程で疲れをあまり感じなかつた。この一聯は三回位に分けてアララギに發表したものである。なかなか氣乘りがして作つて居り、今見てもさう具合の惡いものばかりでは無い。なほ、この一聯は數が多いから、自註も簡潔に從はうと思ふ。

⑥ 今みづから讀んでも何か素直なところがあるやうに思ふ。

⑨ 「富士の夕影」といふのは富士山の後に太陽が沒するとき、その反對側の山麓の雲海から箱根あたりへまでかけて富士山そのままの形の影が映るので、僕等の登つた時は天候の都合もよく、あざやかな富士の夕影を見ることが出來たのであつた。

⑩ 八合目の山小屋（岩室）に落著いてそれからその山小屋の前に出て山麓の夕景を眺めたときのものである。

⑪ 「肥りし友」といふのは五味君のことで、疊一疊位の狹い汽車の寢臺のやうな處に竝んで寢たのである。

⑭ この歌から25までは、八合目の小屋に泊つた翌七月三十一日の午前四時頃起き出で、頂上

を目指してからのものである。寒くて體ががたがたふるへたことも思出される。

⑱ 「光を仰ぐ」といふのは御來迎を仰ぐことを云つたので、朝日が富士山頂に差しそめる時に、細い登山道を幾千の人が竝んで登つてゐるのが、皆各々の歩いてゐる位置に立留つて、その御來迎を仰ぐのは一種異樣な感じであつた。

⑲ 北齋描くところの「富嶽三十六景」中の一つに、「凱風快晴」といふのがあるが、富士山を赤く彩つて書いてある。あたかも「凱風快晴」のやうに岩も土も朝日が差すとき、すべて赤く染つてしまつて全く壯觀を呈するところを歌つたのである。自分も頂上に近いところのこの赤く染つた中に立つてゐるわけである。21 23の歌も同じ光景を云ひ現したものである。

㉕ かういふ光景も富士の頂上にあつて見るとまた感動を覺えずには居られなかつたのである。

㉚ この歌は頂上より太郎坊に向つて砂走りしつつ下るときの歌である。この家族連れとは、歌にある通り、後になり先になりしながら太郎坊の茶屋に著くまで殆んど一緒だつたやうに思ふ。

㉛ 砂走りは富士山の大斜面を實に一瞬の間に走つて下るので愉快でたまらなかつた。强力が

それぞれ手傳つてくれて、草鞋をもう一足横にはいて下らぬと草鞋がもたない程烈しい下り方なのである。砂の深い處ほど走りよく、砂の淺い處は頭へひびくやうな感じがして速力が出せなかつた。負けずぎらひの僕は人が追ひ越すと必ずその人を追ひ越して負けてゐなかつた。それだけの歌である。なほ、佐藤君は○印を7、9、10、14、16、18、19、22、24、26、29、等の歌の上に附けてゐる。

青山北町

1 夏ちかき今宵ふくろふの啼く聞けば青山に移り來て久しと思ふ

2 アパアトの高窓に犬の吠ゆるこゑ朝の鋪道に反響してをり

3 松葉牡丹の赤莖長く降りしきる雨のさ中に絶えず搖れゐつ

4 廣きこの通はさみて若葉せる槻の竝木に日はゆふづきぬ

5 隣家に氣がねして女中を叱りをり妻の留守なる家に歸りて

6 庭なかに一かたまりに植ゑこみし草はおほかた背丈そろへる

7 或る時は悔しきまでにわが心の活きにぶきときありにけり

8 ふるさとの母の爲しごと梔子の花を梅酢に紅く漬けしむ

9 草長けし土手に雉子は出で居れど濠こえて飛ぶを見たることなし

10 この朝は犬の散歩を怠りて出でて來しかば氣にかかり居り

11 日かげりて暗くなるまでのひとときを庭の草々風にそよげる

2 例へば此一首の素材は作者の特徴で目が活いてゐる。これが急所を捉へる時と淺く興味的に終る時とある。此一首は成功してゐる部類ではあるまい。

5 作者と生活とが出てゐる。いろいろ往時を追憶せしめる。

6 平凡淡白。

10 以上數首少し淡淺ならん。

11 何か氣持がある。淡いやうで生きてゐる。

① この一聯は「青山北町」とある如く、赤坂區青山北町六丁目三十六番地の家での歌である。その前は、青山南町五丁目三十七番地に住んでゐた。四五句の「青山に移り來て久しと思ふ」といふのは昭和三年に東京府下荏原郡矢口村から青山南町五丁目の先生の家に近い下宿へ移つて來た以來のことを云ふのである。

② 表參道の同潤會青山アパアトの三階あたりの窓から犬が吠えてゐる處を見て、さういふ處

に犬を飼つてゐる人のあるのに興味を感じたわけである。

⑤　佐藤君が「作者と生活が出てゐる」と云つてゐるが氣がねするといふあたりに自分が出てゐるのかも知れない。

⑦　この歌はやや自分の云はむとする處が出てゐるやうに思つてゐる。

⑧　佐藤君はこのあたりの歌を「淡淺ならん」と云つてゐる。或はまた稚拙な處もあるかも知れない。この歌は説明を要しないが幼い頃母が梔子の白い花を梅酢に漬けて食べさせてくれたのが、子供心にも何か新鮮な感じがして印象が深い。青山北町の家には大きな梔子の木があつた。幼い頃を思出して母のしたやうに漬けさせたといふまでであるが、自分には一種の感動がある。自分が感動してもそれが人に傳はるだけの力が無ければ致し方ないが、さういふことだつて稀にはあつてもかまはぬと思ふ。

折に觸れ

1 アスファルト溶けし鋪道に敷き均すこまかき砂利は黑く沈みぬ

2 建築場を高く圍へる白布がことごとく風張りてうごかず

3 彼岸ばな土手に簇り咲きしかど盛りみじかしうつろふ見れば

4 朱硯の水すぐ乾く暑き日にひと日机にむかひて飽かず

5　青山の町に井戸ある家多きを親(したし)み持ちておもふことあり

6　夏の葉のしげり小暗(をぐら)き庭ひくく蜻蛉(やんま)はおなじ處往(ゆ)き來(き)す

7　紅き實は夜(よる)ひるとなく落つらむかあららぎ生(お)ふる國境(くにざかひ)の山

1　四五句に作者の面目躍如。目が活いてゐる。

2　急所をとらへてゐる。

①　この四五句を佐藤君は面目躍如と云つてくれてゐるが、今ならばも少し何とか工夫したかも知れない。

②　この歌などは相當苦心した跡があり、今見てもさう具合のわるいものでもあるまい。

③　第四句が中心であるが、第五句はなくてもよかつたやうな氣がしてゐる。

④　この歌を讀み返して見ると、健康だつた自分を思出して、よくあんな無理がつづけられたものだといふやうな感じがする。

⑥　この歌は箱根强羅に夏籠つて居られた先生を訪ねた時、同じ强羅の自笑庵といふ貸別莊を借りて來て居た友人を訪ねた時の歌である。

⑦　青山北町の家に土屋文明氏から分けて頂いたあららぎの木があつて、それがよく成長して紅い實がなるやうになつた。そのあららぎから思ひ及んで作つて見たものである。

霧積溫泉

澁澤君同行

1 秋ふけし萱高野原のあかつきに水際の草の霜とけてをり

2 紅葉する木はおほよそに散り透きて青葉たもてるその檀の木

3 高原のうへにし低く離山見えつつ今ぞわれは近づく

4 前山の落葉のうへに裸木の浮き見ゆるまで山はさやけし

5 棚雲の下に晴れたる淺間山見つつ寂しも片明りして

6 霧のながれゆゆしき山の高原をいまだ暗きに歩みはじめつ

7 あかときに時雨すぎにし落葉松のもみぢ明るし空をかぎりて

8 川霧の木の間なづさひ吹ききたる道たづたづし日は照らしつつ

9 谷間より疾き風ふきてひとしきり山に落葉の降るおと止まず

10 紅葉にひかり差しつつ下りゆく道は霧積川をはなれず

11　霧積川はあらき谿間をたぎちつつ水のなごまむ川原さへなし

①　澁澤喜守雄君と霧積溫泉へ行つた時の歌であるが、前日夜行で東京を發ち、朝早く輕井澤へ著いて歩きはじめた（6の歌參看）。霧積溫泉と云つても1から8までぐらゐは輕井澤から峠町に到る間の作が多いのである。

④しかしこの歌は峠町を過ぎ、もうかなり霧積溫泉の方へ近づいた時の歌で、この一聯の中では出來のいい方かも知れない。

なほ、この歌は昭和十二年のアララギ新年號に載つた歌で、出來はあまりよくないが、これまで「童馬山房選歌」に出していただいて居た私が「アララギ共二集」へその一月から出してもらふやうになつたのであつて、自分にはさういふ意味からも記念の一聯である。

冬の海

1 渚橋うへより近き引地川の川ぐちに冬の海は横たふ

2 海のべの夕ちかづきし鋪道にしろく光りて雨ぞ降りゐる

3 新しき松原なかの鋪裝路にせまれる草も冬枯れにけり

4 磯波の音にはあらず沖つ浪空にひびきてここに聞こゆる

5 この海にはじめて來りし十五年まへとはいたく吾は變りぬ

6 小鴉の羽ばたく音にも吾がかつてここに嘆きし思おもほゆ

7 新しき道より低き舊道がをりをり小松のなかに見ゆるを

8 汐止の松原なかに一むらの立枯れし葦あめに明るし

9 夕濱を群れ飛びたちし小鴉ら羽音とよもし西にむかひつ

10 雨やみて砂はらの上に入つ日の赤き光がしばし差したり

11　砂に松葉ちりて有觸(ありふ)れし道ながら過ぎにし人に相見(あひみ)るおもひす

この一聯は大變いい。今更めて始めて讀む如き新しい感銘を覺える。所謂平凡な風光に詩を發見してゐるところ、大兄としても觀入の點に於いて新時期を劃するものか。初め三首、第八首第十首など特にいい。

① この一聯は鵠沼海岸での作である。一番はじめにも云つたやうに、鵠沼海岸は僕の好きな處であつて、時々一人で出かけることがあつた。そして何時行つても相當の感動をもつて歌を作ることが出來た。鵠沼は芥川龍之介氏もよく行かれたところであり、齋藤、土屋兩先生が芥川氏を訪ねて行かれたこともある處である。また岸田劉生氏もよく鵠沼の繪を畫いてゐる。この歌では四五句の「川口に冬の海は横たふ」といふところにやや苦心があるのである。

② この一聯は鵠沼でも海岸附近を歌つたもので、芥川氏がよく泊つた東屋旅館附近からやや離れてゐる。

③ 松原なかの新しき鋪裝路といふのは、片瀬から平塚海岸の方へ向つて海岸沿ひに走つてゐ

る所謂「遊歩道路」とか云つてハイキングコースの一つにもなつてゐた新しい道のことである。

⑤　この昭和十一年より更に十五年前から鵠沼の地に親んだのであつて「十五年前とはいたく變りぬ」といふ處に自分の感慨があるが、一方から云ふと十五年前と少しも變らぬ純粋な氣持も保つてゐることを言外に含めてゐる作とも思つて欲しい。

⑦　十五年前に鵠沼に來始めた頃には鋪裝した新道などが無くて、海岸ぞひの松原に草の茂つた砂深い道があつただけであつた。今でも行くと、その古い道を歩いて昔を懐しむ次第である。さういふ氣持の歌である。11の歌にもさういふ氣持が多分に出てゐる。

昭和十二年

三保

1 三保のうみの遠磯濱は水際まで草は黄いろく枯れわたりけり

2 風さむき荒磯の砂に生ふる草なべて平たく素枯れゆくらし

3 砂たかく海につづけるこの浦に打寄する浪いや遠じろし

4 地底より差す潮の氣のうるほひに砂あたたかき三保の磯畑

5　海べよりかぜ吹く麥の畑には砂地に冬の蠅生きて居り

4　この歌も次の歌も勤勉な作者の眼がある。

この「三保」の一聯及びこれに續く「久能山」「萩原苺園」「龍華寺」並に「鐵舟寺」は同時の作である。この小旅行は、在京のアララギ會員、主として發行所の爲事を手傳つてゐた仲間が毎月會費を少しづつ積立てて置いて、昭和十二年の正月の休みに旅行した時のものである。この時は旅行好きの土屋文明氏が御一緒だつたこと勿論である。一行はたしか十二人だつたと思ふ。まづ清水港から舟で三保へ渡つたのであつた。そして三保燈臺の近くの三保園に一泊した。この時は非常に心くつろいだ點もあり、從つて私は氣乘りがしてこれら五聯作を一氣に作り上げたのであつた。これらの歌はこのやうに氣乘りがして作つたものであつて、自分でもやや自信の持てる作であり、それぞれに觀入のあとを見ていただけば幸ひである。

④　この歌の四五句にしても事實に本づいてゐて、ごまかしがないのである。1の歌の下句、

2の歌の下句、また3の歌の上の句なども所謂寫生を實行してゐる處を見てもらひたい。

⑤　この歌もやはり實際を見てゐて、今でもさう古く感じさせない處がある。

久能山

1 海ちかき久能山のうへにたむろしてさへづりあへる鳥が音かなし

2 この山の繁木にこもり啼く鳥のこゑをし聞けば一いろならず

3 いにしへゆ榮えし山に海鳥も山の小鳥も來啼きとよもす

4 九百尺あまり石段をのぼりたり靑き槇の實ふめば音たつ

5　群りてこの山に啼く鳥が音はみな滿ちたらひたるもののこゑ

1　この數首形式的なり。私の賛成出來ない方の作だが、それにしても作者の技方は確實であぶなげがない。

この「久能山」の五首、なるほど佐藤君の評する通り、形式的の點もあるかも知れない。しかし作者たる私はかういふ境地にも感動し、從て氣乘りがして作り上げたものであつて、單に外形的のみに止まつてゐないところを、それぞれの歌の聲調などからして汲取つていただけば有難いと思ふ。

萩原苺園

1　山幾谷ひらきて苺を培(つちか)へり道路はさみて海にいたるまで

2　潮氣(しほけ)かぜ吹きあぐるらしおぼほしく苺畑は日にきらひ見ゆ

①　久能山山麓の久能村は石垣作りの速成苺の産地で有名なところである。そのうちの萩原といふ苺園に立ち寄つた時の作で、山の斜面がいちめんに苺園になつて居り、上から見下すと、バスの通る道路を挾んで海岸にまでつづいてゐた、そこを詠んだものである。

②　この歌は歸りに下から苺園を見上げて作つた。

龍華寺

1 龍華寺の山門まへにあはれあはれ蘇鐵の赤き實をばひさげる

2 朱の色をしたる蘇鐵の實を取りて君をしぞおもふひとりごころに

3 門前に水きよき川ながれたり寺の後は黄なる竹むら

① 龍華寺は有名な高山樗牛の墓や日本第二と云はれる天然記念指定の大蘇鐵がある。その蘇

鐵の實を何かの藥になるのだとか云つて、山門前の賣店で他の土産物と一緒に並べて賣つてゐるのに僕は感動して作つた。第三句の「あはれあはれ」といふのもよく利いて居ると云つていいであらう。

② 私はその朱の色をした蘇鐵の乾からびた實を少し買ひ求めた。そして手に取つてながめ飽かなかつた。下句の「君をしぞ思ふひとりごころに」と云ふのは、この旅行に來られなかつた齋藤先生を私は何となくひとり心に偲んで妙に涙ぐましいやうな氣持になつたのである。

③ この歌は全く即景の歌であるが、かう簡潔には氣乘りがしないと行かぬものである。これはひとつは先生の歌の影響があるであらう。

鐵舟寺

1　駿河なるみ寺に三年(みとせ)經へたまひし平福先生の遺骨をろがむ

①　鐵舟寺は廢寺となつてゐたものを彼の山岡鐵舟が再興して鐵舟寺と呼ばれるに到つたものださうである。この寺には平福百穗畫伯の描かれた襖があり、また平福先生の御遺骨が納めてあつて、それをこんな處で拜むとは思ひがけないことであつた。この旅行の時は日本平にも登り、また清水港の梅蔭寺の治郎長、大政、小政等の墓をも訪ねた。しかしこれらは歌に作らずにしまつた。

林中

1 洲の上にあがれる鴨ら枯葦を胸分けざまに匍ひもとほろふ

2 水のうへ低き中洲がわが前にありて乾きしところも見えず

3 おほどかに冬のひかりが杉林照らせるを見て和ぐおもひあり

4 ここにして石走るみづ人もなき長き夜すがらとどろくらむか

5 冬さびし池をめぐりて我はおもふ青つはぶきは知人のごとし

6 走出のみづと濁れる池水の渦巻く見ればあらそひに似き

7 笹の葉のしげれる丘の夕日かげ冴えかへりつつ二月にちかし

8 林泉山より午後のひそけき衢みゆ塀に沿ひたる廣き坂道

9 青杉の落葉しづめる庭池の岸ひくくして水ゆたに滿つ

10 諸鳥をかこへる島の金網は水に浸れり芝生ながらに

此一聯は何か感情が流動してゐていい。

1　結句は人麿を意識した詞句だが、調和が取れてゐる。「胸分けざま」に苦辛した結果で、ある素朴な力がある。

6　この種の觀照は作者には比較的少い。これも、先生から學び得た方向の一つであらう。

9　清く豊かでいい。例へばこの歌など一例だが、作者は對象の中から取つて來るものと捨てるものとを的確に撰別してゐる。

昭和十二年頃になつて私の作歌もやや流動し始めた觀があり、氣乘りもして作つてゐる。私の歌は先生に褒められるやうなことも少なかつたのであるが、この一聯は珍しく少しく先生に出來がよいと云つていただき大いに喜んだのである。この一聯の前後から私の歌も一轉機を劃してゐるかも知れない。

①　この歌は樹木の茂つた林の中に池があり、池の中に洲があつて、枯葦が寒ざむと群り立つてゐた。その中を鴨が枯葦を胸で分けるやうなさまで甞つて歩くところを捉へたものである。

②　1の歌と同じ處を見てゐるのであるが、この歌ではその中洲が低くて乾いたところが無

く、しつとりと潤つてゐる處が見所であるであらう。

③　この歌は取り立てて自註を加へる處もなからう。

④　初句の「ここにして」も割合よく利いてゐるやうに思ふし、一首全體としても、何か象徴的な處もあつて、棄てがたく思つてゐる。

⑤　芭蕉の句に「明月や池をめぐりて夜もすがら」といふのがあるが、第二句の「池をめぐりて」は未だ不勉强にして芭蕉の句を全く知らずに出來たものである。下句も當時の私の歌としてはちよつと珍しい方の句に屬するかも知れない。

⑥　この歌も相當骨を折つたばかりでなく、深い感動があつて出來たものである。

⑦　7から10までの歌は謂はばやはり寫生を實行した歌であるが、いまだ寫生をつきつめて行つて象徴の域に達したものとは云へないかも知れない。

安房の海

一

1 妙(たへ)の浦漕(うらこ)ぎ近づけば日の闌(た)けし伊貝が島に鵜の鳥群れつ

2 海(わた)なかの黒き小島に鵜は群れて眞日照る下に啼くこともなし

3 友どりの下(お)りて息(いこ)はむ隙(すき)もなく鵜は竝びたり沖の小島に

4 鵜(う)の島(しま)に漕ぎて近づく舟のなか吾がかたはらにをとめ坐れり

5 思はぬに鵜のゐる島を見にしかば涙ぐましも人に言はねど

6 青潮にかづく鵜見れば萌しくるおもひを永くたもちゆきたし

7 岩秀なすかぐろき島に下り立ちし鵜は大きかり羽をひろげて

8 いつの頃より何に比へて鵜のとりを吾はかなしく思ひそめけむ

9 鵜の群はひそやかにして荒波の立ちくる方に諸向きに居り

二

10 夕潮のたゆたふ海のうへ低くうつろふ雲は磯とほからず

11 海上に峙つ雲の夕映は日かげとなりし濱に明るし

12 この濱に打ち寄する浪高くして浪より迅く飛ぶ潮けぶり

13 松崎ゆ天津にかけし遠磯は人の踏みたる跡かたもなし

14 水淺く海に注げる砂がはの川尻のべは草も生ひざり

15 街道を來しかどわれは松原のなかを通りて海に出でたり

16 あたたかき安房の海邊を行きしかば昨日もけふも雲雀を聽きつ

17 砂けぶり低く立てつつ來る風に我はいつしかつつまれて居り

18 踏みゆけば微かなる音たつるなり堅砂はしろく鹽を吹きゐて

19 海の面に即きてうごける雲白く照りてたまゆら氷のごとし

20 朽木形なして殘れる堅砂は砂ふく風に飛ぶこともなき

21 暮れのこれる空に浮びてゆたかなる夕茜ぐも亂れそめたり

三

22 暗がりにわが寢じ室に入りしをとめ開け放したるまま出でゆきぬ

23 さわぎゐし男をみなら夜更けて別れ別れに寢るけはひすも

24 はしきやし一日たづさひ遊びたる安房のをとめをいつかまた見む

25 冬の夜の月照りわたる鴨川の眞長の浦に一夜經ぬべし

26 安房の海に今日たづさはり遊びたるをとめごの名を吾は知らずも

27 杉苗のいまだ小さき山腹の石あらはにて陽炎たてり

28 砂濱につづける黄なる芝原は砂の中より青く芽ぶきぬ

29 裏白のむらがり生ふる向谷にわが背向より光さしたり

對象がわれわれを捉へる。作者はこの遭逢に感激してゐる。この一聯中の數首は正確に奥深い自然を寫してゐる。「日の闌けし」「眞日照る下に」「荒波の立ちくる方に」等大切なものをのがしてゐない。

11 以下數首も共に自然の觀入が深くなつて來てゐる。

22 以下數首は素材が輕い。

この「安房の海」一聯は雜誌「短歌研究」(改造社發行)で新人の作品と新人の評論とを特輯し

た時に徵求せられて發表したものである。この一聯も集中では大連作の一つである。

① 妙の浦といふのは安房の小湊から近い沖であつて、長塚節の歌にもある筈である。小さい舟でその妙の浦に近づきつつある時に、日の闌けた伊貝が島といふ岩で出來上つたやうな小さい島に、鵜が群つてゐる處を見てゐるのである。僕はかつて佐藤君と羽田へ行つて鵜を見て以來、鵜といふ鳥に一種の愛情を感じて鵜の歌をいくつも作つてゐる筈であるが、この歌は鵜が群れてゐながら何か寂しさが出てゐるのではないだらうか。勿論さういふことを意識して作つた訣ではないが。

② この歌も前の歌と同じ境地を歌つてゐる。

③ この歌では三句までがやや細かすぎるかも知れない。しかし煩しいといふ程でもあるまい。

④ 結句のをとめごは妙の浦へ漕ぎゆく舟に乘り合はせた見知らぬ家族づれのをとめである。かう自註してしまふと、つまらなくなるかも知れないが。

⑤ 四五句は少し大げさに讀者には響くかも知れないと思ふが、1の歌のところで云つたやうに鵜の鳥に對する僕の愛著の一端を現したもので、次の6の歌も同じやうな境地の歌である。8の

歌も同様に受取つてもらつていい。

⑪　互評者佐藤君がこの歌以下數首、自然の觀入が深くなつてゐると云つてくれてゐる。自註を加へぬと分からぬやうな歌でないから、佐藤君の批評を念頭にもつてそれぞれ味つていただきたい。なほこのあたりの歌は13の歌にもあるやうに松崎海岸から天津海岸の方へ向つて砂濱を歩いたときの歌である。

⑬初句の「松崎」の「松」は「待」が正しいと云つてくれた人があるが、自分にはよく分からないままに第四版に到るまでこのまま訂正しなかつた。もし「松崎」は「待崎」が正しいとすれば「赤土」一卷の中で唯一つの誤植といふことになる訣である。

㉔　この歌及び26の歌のをとめは4の歌の時に述べた家族づれのをとめと同じであつてバスも舟も殆んど一緒だつたのである。

㉗　この歌と29の歌は清澄山の裏道を下るときの作である。このあたりの歌（22以下）は佐藤君も云つてくれた通り素材も輕く力が足りないかも知れぬ。

春雷

1
一日晴れ春の來むかふ夜となりて光たばしる坂のうへの雲

2
萌えそめし擬寶珠の芽は日のひかり移ろひぬればさだかに見えず

3
馬場先の水のべに立ち日の闌けし濠の石垣はいろくぐもれり

4
石垣のうへには既も萌えそめし草のたぐひが一條青し

5　夕はやく靄のしづめる代々木原しろき群生は芝芽ぶくらし

1　爽かでしかも強い歌である。「光たばしる」は有つてよさそうな句であつて而も前例が殆どあるまい。この句には逞しい素朴があつて甚だいい。

2　極めて當然な事、當然な表現の中に、或る妙味がある。著實に寫生の道を歩んで來てこのあたり一つの鑛脈に掘り當てたといふ感じがある。

①　三句までにも相當苦心したのであるが、主眼點は勿論下句の「光たばしる坂のうへの雲」にある。佐藤君はこの句をいいと云つてくれたが、柴生田君は「赤土」の批評だつたか何かでこの句にあまり贊成しないやうな口吻であつたやうに記憶してゐる。讀者の判斷に待たう。

②　この歌は庭前に於ける作である。佐藤君が詳しく評してゐるのでそれを御參看願ひたい。

③　私は馬場先門にあつた會社へ學校を卒業して以來勤めてゐたので、濠の歌や丸の内の歌がかなり多いと思はれる。この歌で「石垣はいろくぐもれり」が見どころであり、多年親しんでゐて、この歌が出來た訣である。

⑤　普通の作だと云へばそれまでであるが、四五句の如きは、感動に本づいて、自然に巧まず行つてゐるのではあるまいか。

春一日

1
鴨の子のあはれに啼けるこゑ聞こゆ南池(みなみのいけ)の島のかたより

2
菖蒲田の兩側(ふたかは)ながれ來たるみづ池に落ちゆく音(おと)かすかにて

3
馬酔木(あしび)の芽だちの綠(みどり)くれなゐの色にかはらふ逝く春の日よ

4
あららぎの新芽(にひめ)ほぐれしかたはらに莖(くき)たつ胡蝶花(しやが)の白き花むら

5　公園の鐵柵をけふも塗り替へをり錆どめのままに赤きところあり

1　「鴨の子」を見つけてゐるところは如何にも作者らしい。

2　たくまない寫生であるから色の褪せない味ひがある。

4　美しい歌だ。

①　この歌と次の歌は明治神宮内苑での作である。取り立てて自註の必要もあるまいから、佐藤君の批評に據られたい。

③　これは私の庭の歌である。芽だちの綠がくれなゐの色に變るといふのは、普通考へると反對ではないかと思はれるかも知れない。しかし毎日觀察してゐて實際かういふ光景を見てそのまま作つた訣である。その時期は結句にある如く逝く春の日である。

⑤　この公園は日比谷公園である。青山から市電で毎日日比谷乘換で馬場先へ通つてゐたから、かういふ歌が出來たのである。四五句が見つけどころであるが、上の句も棄てたものではない。

木の芽だつ

1
春あらし土手こえて吹く外濠の水みだれ見ゆガラス窓の外

2
石垣にひかりなごみて濠並に水ゆたかなる五月になりぬ

3
木の芽だつ林の奥に空透きて明るきところ見ゆるは池か

4
小豆ほどありて輝く南洋の赤き木の實に硝子を伏せぬ

5　わが妻は子ども持たねどいくたびか病みて堪へ來し身は清すがし

2　上句は弱くて味妙がない。

5　表面的で響きがない。

②　この歌も1の歌も丸の内あたりの濠を詠んだものである。第三句の「濠竝」は工夫したつもりで、前例がない筈であるが、どうであらうか。

③　この歌は明治神宮の境内での作であつて、表口の第一の鳥居をくぐつてしばらく歩いた處、つまりその參道から左側の内苑の方向を見てゐるのである。

④　これは南洋の會社に勤めてゐた友人小谷心太郎君がその地で俗に「蟹の目」といふ藤あづきの、眞紅のあたかもあづき程ある木の實を送つてくれた。普通の小豆よりももつと艶があつて美しいものである。その一かたまりに硝子器を伏せて机に置いて眺めてゐた。さういふ歌である。結句に特色があると云へばあるであらうか。

走井

1
葦群(あしむら)のしげみに入りし池の鯉背(せな)あらはれて行くも安けく

2
春の泉このくらがりに湧きかへりゆたけくもあるか岩こゆる水(みづ)

3
三月(みつき)經てわれは來にけり池岸の白き躑躅(つつじ)のうつろふ頃を

4
池に生(お)ふる葦の若葉は幼な手の屆かむかぎり拔き棄てられぬ

5　走井(はしりゐ)の淺き瀨となり流れ入る池の汀(みぎは)のひくき石むら

1　佳。大切なものを把握してゐる。

2　佳。自然の一角にこれだけの意味あるものを見てゐるといふのは、つまり寫生が進んで來てゐるといふ事だ。語の連續が實に自然で確かである。

①　林中の池の鯉が中洲の葦群の水に浸つた淺い處を、背中を半ば水上に現して游いでゐるところを大變面白く感じて作つたものである。結句にはその時の自分の氣持がいくらか出てゐるであらう。

②　これは佐藤君の批評を參看していただけばそれで充分である。

④　一月に來た時には枯葦が立つてゐた池に、その後三月を經て來ると、若葉がすくすくと伸び立つてゐる。その葦の若葉が池岸や橋の上などから幼い子供等の手の屆くかぎり皆へし折られてゐるのをかういふ風に表現して見たのである。

土用來

1 癒ゆるまで人に告げじと思ひつつ堪へこし熱はおちたるらしも

2 ビルヂングに沿ひつつくれば丸の内の空ゆふぐれて蝙蝠おほし

3 わがにはに金線草の穂にいでし叢ありて風にみだれぬ

4 龍の髭の花はかすかに咲きそめて暑さもすでにさだまりぬらし

5 合歡のはな薄くれなゐに咲きそめぬ日向に置けば一日たもたず

6 うづだかく石炭積みてのぼりくる舟に午後の日照りてたゆたふ

7 大川を風吹きとほり波たてば中淀を行く舟ひくく見ゆ

8 合歡の鉢部屋に入れしが畫ながらかすかに諸葉とづるあはれさ

5 この手堅さは作者特有である。

7 下句の觀入はやはり此あたりで一進展した境地であらう。厚味のある自然が見える。

① 自分はこの歌に何がな愛著を感じる。何等の巧らみが無いところを見る人は見てくれるであらう。

⑤ 澁谷道玄坂の夜店で高さ五寸ばかりの合歡の鉢植を買つて來てそれを愛玩してゐた。その五寸ばかりの合歡に薄紅の花が咲くのが何とも云へず可憐であつた。この歌ではやはり四五句が中心をなすであらう。

⑦ この歌もさう分かりにくい歌ではない。舟は6の歌のと同じで石炭を積んで上つて行く小舟である。當時友人が色々この歌に就いて云つてくれた筈であるが、差當つてここに出てゐる佐藤君の批評を參看していただきたい。

⑧ 合歡は夕暮になると葉を閉づるのであるが、この歌では晝であるのに部屋の中のやや暗いところに鉢を入れると、夕方のやうに葉を閉づるところに感動がある訣である。

強羅

1 たくましく車前草(おほばこ)の葉のしげり立つ山中(やまなか)の道くもりて晴れず

2 杉の幹めぐりつつ啼く茅蜩(ひぐらし)はしばらく處(ところ)を替へつつあはれ

3 山荒れの跡しるくして道にいでし石みな白し洗はれけむか

4 足に觸るる虎杖(いたどり)の葉も夏ふけて硬(かた)くなりぬと思ひつつ行く

5 蕺草の花むらがりて白く咲く杉生のなかは常に暗しも

6 わが心やや平ぎぬ山莊の疊を這へる蟻をし見つつ

7 夏の夜の月まどかなる高野原奥暗くして虹こそは立て

8 九時すぎて夜ふけしごとき山の上の月は檜原の薄を照らす

9 高はらの道を來りて見つつゐる夏の夜の虹しばし消えなく

10 秋のごと清き月夜にふる雨は山越しの風にまじりくるらし

11 ながらふる狭霧に虹の立てるまで今夜は月の光さやけし

1 作者の自然觀照はもともと素朴な特徴があつた。このあたりはそれに更に或る深みが加はつて來てゐる。

7 この夜の虹は先生と作者と私と三人で遭遇した自然であつた。特殊な現象であるし先生の無意識の力に壓せられたといふ點もあり、私は歌に作り得なかつた。作者はそれを自ら欲するままに作つてゐる。ここに私と作者との相異もある。三首とも手際がいいがもつと原始的な力が欲しい。短歌的にまとまりがついてゐる點が物足りない。

この一聯は佐藤君が書いてくれてゐる通り、箱根强羅に君と僕とで先生を訪ねたときのもので、しかも1から6の歌までは、午前東京から强羅に到著して、晝食後先生と三人で附近を散歩し、山莊に歸つて來て、その場で直ちに作つた歌である。

① この四五句あたりには知らず知らず先生の歌の影響があるであらうと思ふが、それでもなほ、自分の特色が出てゐるやうにも思ふ。

②　この歌は事實を眼前に見つつ即詠したものでなまなましい寫生の歌である。

⑥　これも即詠の歌で山莊の疊の上を大きな蟻が這つてゐるのを、自分も疊の上に腹ばひながらこれを見てゐるのである。第二句の「やや平ぎぬ」の「やや」は少しくまづいと思ふ。本當は非常に心くつろぎ心平いでゐるのだから。

⑦　この歌から後は、夕食後に月の明るい强羅の山道を三人で散歩したときの歌であつて、月の明りで虹がはつきりと現れてゐるのを見て非常に珍しく思ひ、何とかして歌に作りたいものだと苦心したものである。

大島

1 目の下に海にかたむく島山の裾野の木原一冬のいろ

2 海原に影を落して幾ひらの山を離れし雲そらにあり

3 ひといろに草はすがれて乳ヶ崎の端山さながら砂丘のごとし

4 空たかく噴きし煙のみだれたる中に見えをりくれなゐの陽は

5　島山の上わたる陽は午後となり霜どけしたる坂を下りぬ

これは作者と私と行を共にしたものである。既に十數年以前で追懷の情を禁じ難い。大兄には大兄の特色があつて丹念で穩健なのがいいと思ふ。

この一聯、佐藤君の書いてゐる通り、僕が佐藤君を誘つて、急に大島へ出かけたのであつた。この大島行は非常に樂しかつたが、私はこの五首しか殘してゐない。佐藤君はこの時數も多くい歌を作つてゐる。

① 四五句にやや特色が出てゐるかと思つてゐる。その他の歌は取り立てて云ふところも無いごとくである。

霜枯

1 わがにはの霜枯れそめし草むらに日は差しにけり蝗ひそみて

2 厨にて水飲みをりし古參兵一人はいたく噎せつつ行きぬ

3 ひくくとぶ飛行機の上より華散らし今日亡き人のみ魂とむらふ

4 燈火管制のまま夜に入りて公園の木の群立に月照りわたる

1　穩藉で丹念でいい味ひがある。

3　現象的な新しさを持つた素材だが成功してゐる。

① この歌は庭前卽事の一つであつて、四五句のあたりは卽かず離れずのうちに何か氣持が出てゐるやうにも思ふ。

② 日曜か何かで家に居る時に、表參道を演習して通る中の一人の古參兵が、僕の家の勝手口へ來て、水を飲ませて下さいと云つて飲んでゐるのが自分の部屋に聞こえてゐた。そのやや年取つた兵隊さんが水を飲んで噎せながら歸つて行くのが、非常に氣の毒な氣がしてかういふ歌を作つたのであつた。

④ 或る時間になり、一齊に燈火を消したので無くて、晝間から燈火管制をして、そのまま夜になつて行つた日比谷公園にしばらくして月が照りわたつたのを詠んだものである。この歌では一二句に特色があると云へば云へるのではあるまいか。なほこの歌は日比谷公會堂へ先生と一緒に音樂會か何か聽きに行つた時のものである。

昭和十三年

魚附海岸

1 海ちかく防砂造林の松しげり上(うへ)になづさふ雨はれし靄

2 雨やみし魚附(なつき)の海に波立ちて天(そら)にとどろく音ぞきこゆる

3 磯山の下にし見ゆる川口村川(かは)をはさみて燈火(ともしび)つきぬ

① 魚附海岸の累々とつづく砂丘の上に立つと、砂を防ぐために植ゑた小松原が青々として白

い砂山につづき、そのあたりへかけ雨がはれて靄がなづさってゐる處である。この海岸も僕の好きな海邊の一つであり、殊に「魚附(なつき)」といふのが自分には好ましく思はれる。

きさらぎ

1
勤休むことなく吾の癒えゆくを夕さり來る時におもへり

2
後退りしつつ小路をいで行けるトラックがいま向をかへたり

3
擬寶珠の細根あらはれ乾きたる庭の一隅こほることなし

4
犬小屋の藁を燃しし夕庭に毛布の切が燻りつづくる

5　公園を閉す時間の近づくを鐘鳴らしつつ觸れて歩けり

1　「夕さり來る時」はやや騷がしいと思ふ。然し一首は平凡の中に滋味がある。

2　これも先生の歌に學んでゐるが、同じ「トラック」を題材としてゐる點が正直でもあるし、又飛躍がないとも言へる。

5　感情のある一首でいい。もう少し慾があつてもいいと思ふが。

①　第四句の「夕さり來る時」はやや騷がしいと佐藤君が云つてゐるが、さうかも知れない。この歌は勿論上の句に主眼點があり、風邪か何かを引いたのを、無理をしながら勤めてゐるうちに治つてゆく處を歌つたまでである。

⑤　一首淡々として居るやうであるが、そこを物足りなく思ふ人もあるかも知れない。佐藤君が感情のある歌でよいがもう少し慾があつてもいいと云ふのも分かる氣持がする。しかしこの歌はこれでいいやうにも自分は思つてゐる。これだけの題材を單純化してゐるところを見てもらひたいやうにも思ふ。自分はこの鐘を鳴らして觸れて歩くのを歐米などの公園にでも居るやうな氣

持がして感動したものである。この公園は上野や芝や日比谷公園などではない。東京麻布にある、或る公園であることだけ云って置かう。

石神井

1
薄日さす中洲の原は草枯れて砂利のうへに群れし鴨くろく見ゆ

2
つぎつぎに水を離れて夕ぐれの空に翔りぬ秋沙幾列

3
水どりの鴨の羽散れる枯草生春のさむきに蟆子おびただし

4
沼こめて靄立ちなびく日のゆふべ洲原に鴨のくぐみ鳴くこゑ

5 沼に生ふる青藻なびきて湧きいでぬ落合がはの水のみなもと

6 葦枯れし洲にこのゆふべ鴨群れて暗くなりつつこゑ啼かなくに

7 隱沼を低くよろへるこの丘の南ひらきて水流れたる

8 目近より羽ばたき立ちし鴨の群枯洲のさきに落つる水おと

9 さむざむと中洲にたてる榛の木の新芽だつ日も近くおもほゆ

10 水錆びし冬のプールに栴檀のしろくなりたる木の實うかべり

11 水のべの群(むら)だつ黄茅(あぶらぶや)の芽に羽やはらかき蜻蛉(あきつ)すがりぬ

1 かういふ歌になると作者の力がくまなく發揮されてゐる。著實で丹念でも何となくいい。
2 形式的で感情がない。
3 下句は不要。勿論作者は下句を主眼としてゐるのだが。
4 確かだが古い。
6 下句の技巧は美しい。然し見方に技巧が入りすぎてゐる。
7 かういふ歌は全的に贊成出來る。

この一聯は佐藤君がかなり精しく評してくれてゐて、作者たる私にも大いに參考になる。自分としては特に註を加へる必要を感じない。

犬を悲しむ

1 熱たかく病みをる犬の欲るままに庭の草生(くさぶ)にしばし居らしむ

2 命(いのち)せまれる犬を座敷の縁に上げ夜すがらわれは側(そば)をはなれず

3 氷の音きらひし犬があきらめし如く氷嚢(ひょうなう)あてて臥(ふ)しをり

4 涙ながして死にたる犬を悲しめる吾(われ)みづからを言ひがてなくに

5　犬のため買ひし氷が二日(ふつか)經て冷藏庫の中になほ殘りけり

不思議な一聯で何といつたらよいか私にはよく分らない。「犬の欲るままに」「氷の音きらひし犬」などは深切な觀入があるやうでもあるし、觀入が徹底しないやうでもある。思想の力といふものがないといふ氣がしてならない。

佐藤君がこの一聯を何と云つたらよいかよく分からないと云つて居る。全く讀者にとつては訣の分からない迷惑な一聯かも知れない。そこで少しく自註を加へるならば、この犬は京都のある友人から屆けてもらつた小犬を非常に可愛がつて育ててゐたのである。その犬が病氣になつて段段衰へて行くのを何とかして命を助けてやりたいと思つて非常に心をくだいたのであつた。2の歌にあるやうに座敷の緣側にあげて側を離れないくらゐにして看病してやつたのである。犬の好きな人でないと或はこの氣持の分かりにくい點もあるかも知れない。病犬は自分が側に居ると息を靜かに横に臥してゐる（3の歌參照）。それがちよつと自分の部屋へ私が歸つて來ると寂しがつ

て、あたかも病人のやうにうんうんと大きな聲で唸つて寂しがるので、また側へ行つてやるといふ具合である。しかしこの犬も命つたなく死んでしまつた時に、私は涙を流してあきらめ切れないやうに嘆き悲んだ。その氣持を「吾みづからを云ひがてなくに」と4の歌の下句で云ひ現してゐる。實に自分でも今思つても、をかしいくらゐ悲しかつた。

餘談になるが、先生が拙宅へ來られて、「到頭あの犬も死んださうだね。」と云はれた時にも、私は何も云ふことが出來ないで、ぽろぽろ涙を流してしまつたので、先生もおどろいたやうな面持をして居られたことを想起することが出來る。

茗荷

1　椎の木の古葉を寄せていとほしむ庭に僅かの茗荷つくりて

2　群なせる春の小鳥は月のなきくらき夜空を渡り行くらし

二首とも手確いが常識的なところが物足りない。

謂はば埋草のやうな二首であるかも知れないが、一首々々讀み味つていただくならば常識的とのみ云へない點もあると考へる。しかしこの二首は特に自信がある訣では決して無い。

麥秋

1
送り來し小さき山女魚あぶりつつわれ戀ひわたる播磨杉原

2
ひそかなる製車處ありて色赤く塗りし荷車歩道に置けり

3
驅蟲劑效き來るらしわが對ふ校正刷も辭書も黄に見ゆ

4
南の島より送り來し土人の蓑放つ匂ひは香よりつよし

5　馬場先の角をまがりし救急車サイレンの音反響するか

6　麥熟れて香に立つ陸羽街道をひとりし行きぬ草加を越えて

7　郭公のちかく聞こゆる畑中の松並木道に旅人もなし

2　この一首は成功してゐる。斷片的なこれだけの世界だが何か意味がある。

?　作者一流の興味の歌である。

4　同前。下句平凡。

①　結句の播磨杉原は播磨國杉原谷村のことで私の鄕里であり、つまり「杉原紙」の原產地である。三句までは自然なところがあるやうに思ふが、第四句の「われ戀ひわたる」は、やや安易

かも知れない。

② この歌は青山三丁目の電車通に面し北町側にあつた荷車を造る家を見て詠んだ。

④ 土人が月の明るい晩に輪を作つて砂濱で踊るときに腰に著ける腰蓑を、友人小谷君が送つて呉れた。子供の著けるのは赤の一色であり、大人のはあらゆる色彩を織り交ぜたものであつて、南洋特産の、強く幅の廣い草でこしらへてある。その草の匂ひが何とも云へない香りがして、懐しい氣持でこの一首を作つた。

⑦ この歌と6の歌とは同じ處を詠んだ歌である。この歌の四五句は作つた當時自分でも表現が氣が利かないやうにも思つた。しかし現在ではかう鈍重に人は作れないかも知れない。

葛飾水元

1 東京灣に滿ちくる潮の古利根に差すは二時間あまりの後か

2 中川の逆流れ水いきほひて葦生のさきにふくれつつ見ゆ

3 江戸川の水に音して降る雨の粒はうかびて流れつつあり

4 しほどめの水郷に來つ降りしきる雨のさなかの時明りぞら

5 なぎさ邊の道を浸して中川の夕上潮は早くなりたり

6 尾長鳥行くさきざきに居るごとし近づけば飛ぶ土手の樹立を

7 上潮のみづは葦群おしなびけ長き堤の下に來及けり

2 一首獨立して見れば「逆流れ水」だけでは說明不十分ならん。然し下句はいい。

3 「雨の粒はうかびて」といふやうに細かく確かな觀察は作者の長所と思ふ。

4 用意のある歌でいいが「水鄕」は結局平俗か。

5 調子がのびのびしてゐていい。見どころは勿論いい。

7 平凡のやうで平凡でない。確實で生きてゐる。

この一聯の水元水郷は葛西、浦安一帯の江戸川水郷と共に東郊の二大水郷の一つである。この時は田植の濟んだばかりの頃であつて、私ひとりで行つたのであるが、途中雨に降られて困つたことなども思ひ出される。なほ、この一聯の歌の順序は歩いた順になつてゐるといふ訣ではない。

① あたかも滿潮時と見えて、上潮がこんな東京灣から離れた處まで滿ちて來るのに感動を覺えた訣であつて、渡舟の船頭に聞くと、このあたりへ潮の差すのは東京灣が滿潮になつてから先づ二時間ぐらゐ經つてからですねと云つて話してくれた。さういふ事も思ひ出される。

② 第二句の「逆流れ水」は、潮が滿ちて水がどしどし上流へ逆流して來ることを、かういふ表現にしたのである。

③ 佐藤君の批評に盡きてゐて註を要しない。

⑥ 櫻堤と謂ふ櫻並木のつづいてゐる道をひとり歩いてゐると、櫻の茂みに尾長鳥がゐて、僕が近づくと行手の方へ飛んで行き行きするのが、何か寂しい哀れな氣がしたのである。つまり堤の兩側は廣々とした水田になつてゐて、尾長鳥はこの櫻並木を離れて飛ぶことをしなかつた。

砂の庭

1 亡き犬のかたみの首輪黴ふくをあはれに思ひ日向にいだす

2 幾日ぶりに屋外燈のともりたる街をし歩む思ひ静けし

3 わが庭の砂日に焼けて暑けれど金線草はその穂見えそむ

4 暑き日に働く吾等たまさかに麥酒を飲みて息づくものを

5　庭くさに群るる蟋蟀が金網にとびつく音とおもひ聞きをり

3　微かで清い空氣が出てゐる。表現が自在だ。

前に「犬を悲しむ」といふ一聯があつた。その亡くなつた犬の、革に金具を嵌め込んだ首輪を、形見と思ひ殘しておいたのが、見ると黴をふいてゐるので日向に乾したといふまでであるが、何がなし自分の氣持が出てゐるやうに思ふ。

③　これは多分晩夏の歌で、庭の砂に照る光はまだきびしいけれども、もう金線草の穗が見えはじめたといふのである。穗とはあの長い花の穗である。金線草は、先生が歸朝されて間もなく作られた歌に「秋ふけし日のにほひだつ草なかに金線草もうらさびにけり」と云ふのがあつて、それから私はこの草を、殊にその可憐な花が好きになり、庭に澤山植ゑ込んだ。僕の歌にはいくつも出て來ると思ふ。いつぞや俳人の富安風生氏にも根こじにして差上げたこともあつた。風生さんはこの時のことを隨筆に書いて居られる。

朝霧

1 いつの間に夏過ぎむとしあかときの鋪道にしろく朝霧ながる

2 虎耳草の鉢に夜ごとに墓上り平たく居りぬ朝明くるまで

3 鴨跖草は庭にみだれて暑き日の少かりにし夏ゆくらしも

4 月させる庭に蜆蚌がむらがりて草食むかすかなる音きこゆ

5 夏霞杉のおもてにかかれりと先に起きたる友のいふこゑ

6 七月ごろ妻が買ひこし黒麥酒（ビール）小壜がいまだ手もつかずあり

7 荒れあとの庭の草々おのづから起きかへりたり十日餘りに

8 かげろふは身にまつはりて堪へがたき暑き日なかや衢（ちまた）ひそけし

2 「平たく居りぬ」は見てゐる所であるが、「夜ごとに」「朝明くるまで」といふのは果して必要か。

4 或る空氣が出てゐる。もう少し調子が鋭く行きたかつた。

6 小さな成功はあるが、消極にすぎない。

8　結句が弱い。

この「朝霧」一聯も折に觸れて作つたものであるが、今見ると物足りないものが多くて、かういふ處にぐづぐづしてゐた自分を齒がゆく思ふのである。

深大寺附近

1 水底の白砂がひかりを照り返しかげろふの如くゆるる水くさ

2 無患樹の黑き實あまたこの寺の庭に踏まれて沈みゆくらし

3 くれなゐに其の實かがやく山茱萸は竹群かげに一樹ありしのみ

4 道のべの霜どけしたる鴨跖草は茹でたるごとく今朝はなり居り

1　堅實でしかも動きのある一首でいい。

4　實にうまい。

平福百穗畫伯の忌日に土屋先生始め在京のアララギ會員の有志が多磨墓地にお詣りして、それから歩いて深大寺へ行つた時の歌である。

①　深大寺の森の中に養魚場があつて實に清い水が湧いてゐることは行つたことのある人は皆知つてゐるであらう。そこを見てゐるのである。

②　深大寺の庭に大きな無患樹があつて、その實が樹のもとに澤山落ちてゐた。黄がかつた皮に包まれたのもあり、皮がとれて黑い實だけのもある。これが多くの參詣人といふよりも徒歩行樂者が來る度に踏まれて土の中に沈んで行くらしいといふのである。なほ、この無患樹の堅く黑い實を包んでゐる外皮を採んで、手を洗ふと、石鹸のやうによく泡が立つものである。

武藏野小吟

1 くろぐろと靡く水藻のあひだより見えつつ清し苔づかぬ砂

2 蔓枯れし零餘子を取るに脆くしてほとほと土に落ちてしまへり

3 栗の毬み寺の庭に乾してあり寺に居る人この冬焚かむ

4 山かげの泉ゆたかに湧きかへり水底きよし砂たむろせり

5 底ふかき泉の砂に立てる草みづの面にとどくことなし

6 外套のかくしに入れて今日持てる木の實いくつか手草にしつつ

7 よわよわと赤き蜻蛉が飛びきたり明るき池に羽をふるはす

8 この岡の幾ところより湧く水が流となりて野を横ぎれり

9 銀杏の實一めんに落ちにほひだつを拾はむとして吾は見て居り

10 搖れなびく藻とまがふまでくろぐろと鱒群れ游ぐ水疾き池に

3　素朴ないい味ひがある。
7　表現が實に微妙でいい。
8　一種の感慨はあるが、何となく形式的な感じがする。
9　平板に終つてゐる。

この一聯はすぐ前の「深大寺附近」と同時のもので、發表誌が異つたために二つに分けたものであつただらう。

①　深大寺の森の水の澄んだ養魚池の歌である。この養魚池は底が白砂で實に清らかな感じである。

③　この寺は多磨墓地から深大寺の方へ歩いて行く途中にある寺で、墓地にはたしか新撰組の近藤勇の墓があるが、その寺の前庭に栗の毬が澤山集めて並べ乾してあつた。寺の人が冬の焚代にするのであらう。いつしよに行つた連中が裏の墓地の方へ行つてゐる間に僕はその庭に一面に落ちてゐる銀杏の實を拾つた。どうしてこんなに澤山落ちてゐるのに誰も拾はないのかと不思議に思つてしばらく見てゐた。その歌が9の歌である。

⑥　この歌の木の實は無患樹の實である。

⑧　この深大寺の境域は樹木が繁茂し、後が岡になってゐて、水がどんどん湧き出して一つの水源をなしてゐる。そこが云ひたかったのである。

昭和十四年

杉原谷村

1
我が生れし杉原谷に棲む鹿は晝さへ村にいでにけるかも

2
草枯れし高山はらを行く鹿のなかに鹿の子もまじりあるべし

3
但馬より山を越えくる鹿のむれ北播磨路に冬長く棲む

4
ふるさとの高野にたむろせる鹿の鳴くこゑ聽かずすでに幾年

5　わが歸り住む日のありと思はねば鹿殖え來とふ山は戀しく

この杉原谷村は兵庫縣にあつて、私の鄕里であることは旣に書いた。この一聯は今次の戰爭で戰死した僕の從弟山口忠雄がまだ少年の頃、鄕里の樣子をいろいろ知らせてくれた。その手紙を讀んでゐるうちに非常に感動するところがあつて、この一聯五首は一氣に作つたものである。佐藤君はこの歌に對して何も云つてくれてゐない。或は君はこの一聯を形式的に感じたのかも知れない。しかし僕自身は衝迫を感じて心のおもむくままに一氣に作つた。なほこの歌の中には從弟の手紙を讀んだのでなくて、自分が村に歸つてあたかも鹿を眼前に見てゐるやうな歌もある。例へば2の歌の如きである。しかしこれは空想ではなくて自分が歸省した時の經驗を生かしたものである。

①　私の村には秋になると、何千といふ鹿が山に移住して來て、鹿の狩獵地として有名になつた。この歌にある通り、晝間でさへも、村へ出て來る程である。初句の「わが生れし」、結句の「いでにけるかも」、この句なども古いかも知れない。しかし僕が衝迫を感じて作る場合にこの力のこもつた句でなくてはどうしてもならぬといふだけの氣持で用ゐたものである。

② 草の枯れた山腹を鹿が群つて走るのが家から肉眼でよく見えるのである。その鹿の群の中に仔鹿もいつしよに居るであらうといふのである。僕は少年のころ山に行つて、猪が自分のすぐ前の枯草群から仔猪を四五頭連れて逃げるのを見たことがあつた。鹿も多分さうだらうと思ふのである。

③ 結句の「冬長く棲む」ははじめ「冬長く棲め」と作つたのであるが、先生が「冬長く棲む」の方がよいと云つてなほして下さつたのである。

④ 鹿の鳴くこゑは秋ごろ一番盛んである。晝間からしきりに鳴くのが村へ聞こえて來る。その鹿の鳴くこゑもしばらく聞かない。年老いた兩親や祖母にもしばらく逢はない、申訣ないといふやうな氣持も心の中にある訣である。

⑤ 僕は兩親にとつては、たつた一人の子である。その僕が少年の頃から東京へ來てしまつた。もう鄕里へ歸つて暮すやうなことがあるとは思はれない。さういふ自分にとつて、從弟の手紙によると年々鹿が殖えて來るといふ、さういふ故鄕の山が戀しく思はれるといふのである。この歌は一聯の中でも自分の最も感動して出來たものであつて、この一聯を作つたときに、自分で讀みながらみづから感動して涙のにじむのを押さへ切れなかつた。かういふことは自分でも多くはない。

霜

1 晝すぎより吹雪(ふぶき)となりぬ濠に張りし氷の上に雪つもる見ゆ

2 寒に入り日ごと街路樹の枝挽(ひき)をり鋪道(ほだう)にしろく散れる鋸屑(おがくず)

3 この事務室に四石二斗の酒積みて出で入るごとに匂ひてやまず

4 降る雪の雨にかはりし音きこゆ播磨風土記を見つつ夜ふけて

5　わが妻が下仁田葱をうづめたる庭のふくらみに朝々の霜

1　緊密でいい。

2　ここには單なる嘱目以上のものが出てゐる。調子も甘滑でない。

①　丸の内馬場先門の濠端のビル階上の事務室からの嘱目である。ただの通りがかりに詠んだものでないことは、上の句のみを以てしても分かるであらう。

②　これも毎日通勤する途中の日比谷公園附近での作である。

③　私の勤務してゐた會社の事務室に或る代理店から贈られた薦被すなはち四斗入りの酒樽を十樽積んだのであつた。その頃は酒の統制などもなく、自由に買ふことが出來た時代である。一列に四樽その上に三樽、さらに二樽、一番上に一樽積上げたのはなかなか壯觀であつた。四石二斗といふのは四斗樽と云つても四斗二升位はひつてゐるのが普通で、四石二斗有る訣である。

王攸琴

1 きさらぎの今日零りし雪庭にありて夕ぐるるまで空かがやきぬ

2 いもうとが稚兒(をさなご)のため雇ひ來し王攸琴(ワンイウチン)は愛(かな)しき少女(をとめ)

3 吾よりも貧しく育ちけむこの少女(をとめ)は汁溫(しるあたた)めて食ふこともなし

4 姑娘(クーニヤン)が起(おこ)しに來(きた)る朝々をこころなごみて吾は目ざめつ

5　朝より空を蔽ひて降りみだる雪は底融けしつつ積りぬ

1　堅實で美しい。

2　輕い。

4　作者の働く眼が時に興味に終始する一面がある。この如きはその極めて著しい例なり。

5　周到な用意もあり、確な歌だ。四五句、斯く簡潔に要を盡すのは實行に即して味ふと何ともうまい。

①　この歌は佐藤君の批評によつて鑑賞せられたい。

②　妹といふのはつまの妹のことである。その妹の夫が病氣のため、その稚兒と王攸琴といふ子守の少女を僕の家にしばらく預つてゐたときの作である。

③　僕も隨分貧しい農家に育つたのであるが、この少女は僕よりももつと貧しく育つたかも知れないと思つて、貧しく育つた自分は大いにこの少女に同情を寄せてゐた。この少女は僕たちが朝飯などを食べる間子守をしてゐて、後でひとり食事するのであつたが、二月頃の最も寒い時に

でも味噌汁などの冷えたのを溫めないで冷めたいのを平氣で食べてゐた。そこを云はうとしたものである。

④　この幼い姑娘が拙いながらも日本語を使つて、寒さのために朝寢しがちの私を起すのである。やかましく云つて妻に起されると腹の立つことがあつても、この少女が起しに來ると心がなごやかになつて素直に起きたといふのである、佐藤君はこの歌を興味に終始する極めて甚しい例であると評してくれたが僕は必ずしもこの評に贊成出來ない。

春嵐

1 春あらし濠を吹きとほり荒海のごとく水げむり高くあがりつ

2 濠のみづ日にきらひつつ飛沫(しぶき)あげて吹きしく風は止むひまもなし

3 せばまりて鋪道(ほだう)のさきに見ゆる濠かぜ強くして波うちあへり

4 濠端の百合の竝木の芽吹かむとするあらき枝かぜに搖れつつ

5　夜の濠にともりし高き電燈は風しづまりし水を照らしぬ

1　簡單な事實だが、どこか出きてゐる。調子が澁つてゐるのもいい。

3　この自然の一角は生きてゐる。

この一聯も丸の内勤務の途中及び勤務中の折々に作つたもので、當時としてはそれぞれ少しづつ骨折つたところがある。取り立てて註を要する歌ではないから簡潔に從はう。

松の芽

1
古莖のなかに青萱萌えいでてうつつにものの充ちゆくごとし

2
馬酔木の花うつろふ傍に枯木なす合歡は五月に入らば芽ぶかむ

3
虎耳草ほそぐき紅く透きとほり一人し居ればおもふことなし

4
松の芽の長くし立てる磯山のせまぎ鋪裝路しめり乾かず

5　行く春の山に徹(こほ)れる雉子(きじ)のこゑ啼きつつ谷をわたり來るらし

1　下句は先生の歌から來てゐる。然し上句は巧みだし、下句への連續も無理がなく手に入つてゐる。

4　二句から三句以下への續きが無理だと思ふ。

5　先生の歌に似てしかも古い。

①　この一聯は處々の歌がいつしよになつてゐる。この一首は郊外での所見であつたと思ふがいくらか骨折つたところがある。

②　この歌と次の3の歌とは自分の庭の歌である。

④　この歌は熱海の少し先の魚見が崎海岸での作である。

⑤　これは十國峠、日金山から湯河原へ下る途中の歌である。

可動橋

1
楢のはな高き枝より垂れ咲きて木のもとに散るくろき花房

2
可動橋今し開きて築地河岸の道のまともに高く峙つ

3
風のなかにサイレンの音きえゆきて可動橋はいつしか降下しはじむ

4
開きたる可動橋は高く大川の倉庫のうへに空をくぎれり

1　寫生のいい味がある。

2　現象的に新しい素材を作者は敏感に捉へる一面がある。そしてそれを目立たない手堅い手法で表現してゐる。これはその比較的成功した部類ならん。然し「可動橋」といふ言葉がどうも物足らない。

①　この歌は明治神宮表口の鳥居をくぐらずに、その右の省線に近い道を散歩してゐた時の作である。楢の木は自分の幼い頃から親しんだ木である。僕の鄉里では楢のことを「ほうそ」といふがこれは「ははそ」の轉訛であらうと思つてゐる。なほ、先生の歌に「楢の葉のあぶらの如きにほひにもこのわが心堪へざるらしも」といふのがあつて、私の愛誦してやまぬものであることをここに書き添へておく。

②　築地関橋の可動橋が出來て間もない頃に行つて見た時の作のやうに記憶してゐる。新しい素材を充分詠みこなしてゐないやうな處もあり、自分で滿足してゐる作ではない。

草蜉蝣

1
夜ふけし机のうへの電燈に草蜉蝣はいづこより來る

2
虎耳草のかすかなる花は咲きしまま素枯れて土に散ることもなし

3
人絶えてゆふべひそけき丸の内來啼く鳥が音しげくなりたり

4
目下の甍に雀ら群れ啼きて白夜に似たる夕とぞおもふ

5　鶺鴒が飛び去りがてに啼き立つる原の草むらを吾はあやしむ

1　見方が浅く奥行がない。

2　作者一流のこまかい觀察があるが、表現が弱くなまぬるい。

3　かういふまとまり方を私はこのまない。もう少し鋭く行きたい。

取立てて説明も要らず、普通の作にすぎないであらう。

物の響き

1 雀らは物のひびきに恐れなく電車軌道にちかく下りたつ

2 颱風の襲へる夜を室ごとに蛟遣のけむり横になびけり

3 七階のうへより濠の波見つつたまゆら河の流のごとし

4 海潮の音おもおもとつたひ來る岬の木立くもりて晴れず

5　年少く氣負へる友と酒のみて論らひしを記憶するのみ

1　面白いやうで一面表面的でもある。

2　いい歌だ。「室ごとに」「襲へる」にいくらか問題があるとも思ふが。

4　「おもおもとつたひ來る」は先生にあつたやうに思ふ。「くもりて晴れず」は前に出たが、これも或は先生になかつたらうか。とも角一首は自然の混沌とした深みを現はし得てゐる。

①　日比谷から馬場先門に到る電車の中から見て作つた歌で、取り立てて云ふ程のものでは無いかも知れない。その當時友人小谷君が東大に恩師の南原繁教授（現在の總長）をお訪ねしたとき短歌の話などせられて、その折この歌に就いて、丸の内のやうな高層建築の並んでゐる處に雀などの棲んでゐるのを見てゐるのは面白いと云はれたさうである。

②　颱風の吹き荒れてゐる夜を、雨戸を閉ざしてもやもやと蒸し暑い部屋に不安な落著かない氣持で坐つてゐる。あたかも心の遣りどころが無いかのやうに蚊遣の煙が部屋にたなびいて動かない。さういふ歌である。

③ 毎日のやうに事務室から濠を見てゐるわけで、それが風のある日に波が一方へ立ち動いてゆくのが、じつと見てゐると河のやうな感じがして來ることがあつた。さういふ一瞬の氣持をかう表現して見た。

⑤ 左千夫先生の忌日に土屋文明氏他十人程で龜井戸普門院のお墓に詣つた。それから水元水郷の近くまで吟行に出かけ、夕ぢかく淺草にかへつて鰻屋に上り、したたか酒やビールなどを飲んだ。その席で今は亡き相澤正君と短歌に就いて議論をした。その折の歌である。その時に土屋氏が作られた歌に「鰻まつひまに臭木の蟲をあぶる吾が友みれば少し醉ひて居り」といふのがあつてこれは私のことを詠まれたものである。

七月九日

1 暑かりしひかり夕づく頃ほひに澤蘭のしろたへの花

2 あかつきの表參道に蠅あまた吾にまつはるあやしきまでに

3 幼等は通風孔に紙をならべ地下鐵道の風幾度も待つ

4 家の中にゐてわが顏のほてるまで暑き七月九日の晝

1　整然として美しい。

2　表面的な感じがする。「あやしきまでに」で一種の氣持を出してゐるが、これを解決した後の感情を歌ふべきではなからうか。

3　新しい街頭小景といふ以上の意味がない。

③　青山通に地下鐵道が完成して間もない頃の作だつたと思ふ。ある間隔を置いて地上に通風孔があつて、そこに鋼鐵製の目の粗い網戸のやうな蓋が出來てゐる。子供達が新聞紙などを細かくちぎつてその上に並べて地下鐵道の通るのを待つてゐる。地下鐵道が通るときにこの通風孔へ風を吹上げてその紙片が高く高く舞上つて行く。子供達は何回もこれを繰返してゐた。

④　七月は云ふまでも無く梅雨が明けて日照りもきびしく、八月よりも却つて暑いやうな感じを覺える。「七月九日の書」と云つたのは森鷗外先生の亡くなられた忌日であつて、さういふ暑い日に亡くなられた鷗外先生のことも自分だけの心の中にあるわけである。

晩夏

1　夏日でりきびしかりしが丸の内の濠には早き鴨ぞわたれる

2　松葉牡丹咲きむらがりし砂原に差せる晩夏のひかり寂けく

3　一日照り夕づくころを青き藻の中にひそまり鯉は睡れる

4　夜ふけまで明くかがやく夜の雲澁谷の方に絶ゆることなし

① 日でりのきびしかつた夏もやうやく過ぎむとして、丸の内の濠にもう鴨がそろそろ浮ぶやうになつたのを見て、夏の嫌ひな私は一息ついたやうな氣持であつた。

② この歌は前の歌とは勿論情景は異るけれども、同じやうな自分の氣持が出てゐるのではあるまいか。

③ この一首は先生に從つて多磨墓地の神保幸太郎博士の墓參をし、その歸りに道案内かたがた深大寺へ先生と二人で行つた時の作で、有名な「深大寺そば」といふ手打そば屋のかたはらの池を見ると、鯉がいくつも青藻の中に睡つてひそまつてゐるのをあはれに感じた。この時の先生のお歌は歌集「寒雲」に出てゐる。なほこの一首は「晩夏」の中にあるが、五月末日の歌である。

左千夫先生墓參

1
普門院の墓地は立木もまれにして玉蜀黍が蔭をつくりぬ

2
上著ぬぎ手に持ちながら普門院をいで來て君のあとに從ふ

3
夏霞おぼほしくして退潮の大川のみづにほひ來るかも

4
かつて我が相見えつる人のごと君を思ひてゐたる時のま

5　この夏の暑さはここにきはまると思ひし今日よ忘れざるべし

1　下句がいい。

4　何といふ事のない内容だが歌調がのびのびとしてゐて息が永いのがいい。

5　結局平凡な一首。「ここにきはまる」は通俗だし、結句にも内容がない。

①　普門院の左千夫先生のお墓には戰爭以來お詣りせずに居るが、その墓地は山の手の寺などと違つて龜戸天神に近く木立といふやうなものが殆んど無い。たまたま玉蜀黍が墓地の間に植ゑてあつてその蔭が眞夏の日照りにきはだつてゐたのが注意を惹いた。

②　結句の君といふのは土屋文明氏でこの少し前にある「物の響き」一聯中の年若く氣負へる友云々の一首で註を加へたのと同じ日の作である。

④　四句の「君」は左千夫先生のことを云つたのである。

⑤　左千夫先生の忌日は七月三十日で一年中で一番暑い最中であるから、アララギの左千夫忌

歌會はたいてい五月頃に繰上げて催すのが例になつてゐた。しかしこの年の七月二十日は丁度日曜だつた筈で、土屋氏はじめ少數の有志で墓參をし、兼ねて水元水郷の方へ吟行したのであつた。いかにも暑い日であつたことが思出される。

箱根山上吟

1
碎石機の音のひびける高原は茅萱はなべてその穂見えそむ

2
貯水池の上をわたりて相喚ばふ木魂はわれのこゑに似たりや

3
石碎く機械のおとはととのはぬ響たてつつ小屋より聞こゆ

4
鳥がねの聞こえぬ山のいただきに石にむらがり飛べる蜻蛉ら

5　となめせる蜻蛉の群は青草の峠をこえてここにたむろす

1　前にも「その穂見えそむ」といふ句があつたが、この歌も一ふしあつて良い。

4　上句はやや形式的に作つてゐる所があるやうに思ふ。然し下句は流石に見てゐる。

5　「たむろす」といふ言葉が安易だと思ふ。

①　上強羅の歌で山荘から大湧谷へ行く途中での所見である。

②　大湧谷の少し横の山中に可成り大きい貯水池があつて、その水面に向つて木魂を呼起して見たときの一首である。

③　上強羅の薄の茂つた原の中に小さな小屋があつて、石を砕いてゐる音がひびいてゐた。石を放りこむとこまかく砕けるまでのしばらくの間、機械の調子が整はないひびきを立ててゐる。そこがこの歌の中心である。

⑤　結句の「たむろす」はなるほど佐藤君の評してくれたやうに安易にすぎるかも知れない。しかし、この歌では「となめせる」と「青草の峠」に少しく苦心があわるけである。

神田上水

1 家いで來て三十五分經ちしわれ神田上水の源流を行く

2 水明りかすかに差せる砂の上に黄にひかりゐる黄金鯰

3 わが眼より高く湛へし水中を魚を銜へし鵜はのぼりゆく

4 天つ日を迎へて山を歩くけふ終日家に入るを許さず

彼岸中日

1　平凡。

2　興味的なり。

①　青山北町六丁目の家を出て神宮前から都電に乘り澁谷で帝都電鐵に乘換へて、井の頭公園の神田上水の源流へ行つた。餘程都合よく行つたと見えて源流へ著いて時計を見ると家を出てからまだ三十五分しか經つてゐなかつた。それだけの歌である。佐藤君の云ふごとく平凡であり或は興味的であるかも知れないが、一首の調べは緊密であつてさういふ點だけでもただの平凡にのみは終つてゐないと思ふが如何。

③　これはその水族館での作で、僕の背丈よりもずつと高い大きなガラス張の水槽に鵜が幾匹も飼つてある。鵜は前にも云つたやうに僕の好きな鳥である。そこに飼つてある鵜に見物人がそこで泥鰌を買ひ求めて鍼力の管から水槽の中へ入れてやると、泥鰌が水槽の底に沈まないうちに鵜は巧みにこれを銜へて水面に上つて來ては呑み込む。そこを飽かず眺めてゐた。

④　丁度この日は秋の彼岸の中日であつた。そこでこの一首がある。この歌は鄕里に於ける少年の頃を思出して作つてゐる。春と秋の彼岸の中日に鄕里では年寄や子供たちがお辨當をこしら

へてもらひ、朝早く東の山の峠（つまり丹波との國境）まで登つて太陽をお迎へして、夕方西の山へお送りする風習があつて、その彼岸の中日には太陽を西の山に送つて歸つて來るまで家の中へ入つてはいけないことになつてゐるのである。さういふ歌である。

野火止

1
辨當の殼(から)ことごとく焚きて去る山に寂(しづ)けさのかへる思ひに

2
平林寺の中めぐり來(こ)し上水が野火止(のびどめ)の野(の)にをりをり光る

3
平林寺の苔踏む庭をとほく來(こ)し徒歩行樂の人むれて過ぐ

4
野(ぬ)のうへに蓼藍(たでああかざ)らが一いろに色づきそめぬ武藏の國は

5　草がくり流るる野火止の上水は土に霜降るころは濁らず

1　よく現れきれてゐない。そのために何か説明的にひびく。

2　構造が手に入つてゐる。

①　これまた土屋文明氏他、在京のアララギ會員が野火止平林寺に行つたときの歌である。ある林の中に入り晝食をしてから、散らかつてゐる辨當殼を全部集めて焚いてそこを出た。辨當殼や包紙などが一面に散らかつて何か騷々しいやうだつたのが、かうして後始末をするとふたたび山が靜かになつて來るやうな思ひがしたのであつた。さういふ氣持の一首である。

②　野火止平林寺の境内に湧く水は豊かであつて、勢よく流出してゐた。つまり野火止上水である。それが平林寺を出て志木町の方へ歩いてゐると、野をゆたかに流れてゐる上水の流が時々秋日に光つて見える。それだけの歌である。

④　平凡な自然の歌であるが、四五句の「色づきそめぬ武藏の國は」といふ、かういふ鈍根な云ひ方は僕でなくては、氣の利いた歌を作る人には、云へないかも知れない。

落葉

1 坂のぼり來(く)るトラックは遠くより夜(よる)の鋪道の落葉を照らす

2 丸の内の空より降れる晝時雨(ひるしぐれ)かぜ強くして流るるごとし

3 鋪道挾みて石炭つみし空地あり蜻蛉らはそのあたりを去らず

4 幾たびか霜の降(お)りたるこの岡の小松が下の草あをあをし

5　燈火なき夜に迷ひて伊豆沖の秋刀魚は網代に寄せゐたりとぞ

1　神經が働いてゐて何となく新しいところがある。

2　作者の生活が出てゐる。背景にあるものを感じさせる。

3　前の「石にむらがり飛べる蜻蛉ら」と相通ふ觀入であるがこの歌も良い。これも此當時作者が開いた境地といふ事になるだらう。

①　この「坂」とあるのは明治神宮表參道のアパートの前あたりから市電の方へ向つて坂になつてゐるところである。その鋪道に散り積つてゐる並樹の落葉をトラックのヘッドライトが照らし出すところである。

②　この歌も例により僕の丸の内日常吟の一種である。佐藤君の批評を參看せられたい。

⑤　これは内幕を云ふと、新聞記事に據つて作つた。常に陸岸の燈火を目標にして一定の距離を置いて群游してゐたであらうところの伊豆沖の秋刀魚が、燈火管制の夜に誤つて網代灣に寄せて來て一擧に漁獲せられた。さういふ記事があつて大いに興味を覺えたのである。

北の空

1 街路樹も電柱もなきビルヂングの間の鋪道かげりそめたり

2 光なき雲垂れきつつ窗に似し北の眞澄にやうやく近し

3 街並樹の間をよぎり行くときにはつかに白し今朝の初霜

4 日比谷より櫻田門に至るまで百合の並樹は一葉だになし

5　目の下の甍に鳶のとまりしを女子社員等ならびて見ゐる

1　興味を持つて觀察する作者の特徴がここにもある。そしていい所を見てゐるが、表現はいまだ十全とはいひ難い、殊に結句など。

3　やや古い。

①　これも亦僕の丸の内吟のひとつである。丸ビルと郵船ビルとの間から日比谷に向つてゐる鋪道、そこを私は晝の休に毎日のやうに馬場先から丸ビルへコーヒーを飲みに行つた。その道路だけは街路樹も電柱も一本も立つてゐなかつた。そこに或る感興があるわけである。結句の「かげりそめたり」も表現が充分でないかも知れぬが相當に骨折つて作り簡潔に行つてゐるのではないだらうか。

②　初冬の雪でも來さうな、どんよりとした光の無い雲が北空にだんだん垂れつつあつて、その下には、はつかに澄み透つた空があたかも窓のやうに見えてゐる。そこをやはり丸の内のビル

から見て作つた。

③　結句などは成程古いだらう。しかし落葉した街路樹の根方の石壘の中に丸く殘されてゐる土にまつ白く霜が降りてゐるところに見所があつた訣である。

④　註を要しない歌だが、日比谷から櫻田門までの間の並樹は百合の樹であつて、この百合の樹も僕の好きな植物の一種である。百合の樹を觀察してゐると、この樹は黄葉して落葉するのも他の樹より早く、また春芽吹くのも一番早い。

⑤　これもビルの階上の事務室に於ける作である。まことに取りとめもない平凡な歌ではあるが、その當時私の下で、あるひは私と共に働いてゐた勤勉で邪氣の無い女子事務員等が何かを窓から見下してゐるので、私も見下したところ眼下の低い屋根の上に鳶が止つてゐる。丸の内のやうな高層建築の並んでゐるところで鳶を眼近に見下ろしてゐると、山などで見るのと何が違つた感じがするのであつた。

冬日

1 湯を詰めし水筒に足を溫めて病(やみ)臥(ふ)すといふ君をしおもふ

2 霜解(しもげ)のかすかに見ゆるわが庭は午後二時すでに日はかげり行く

3 帝劇をこめし高層建築群の灯(ひ)は濠に映(て)り此岸(しがん)に及ぶ

1 淡白で捨てがたい味ひがある。

2　つゝましくて良い。表現も無駄がない。

①　これは親しかつた友澁澤君が湯たんぽの代りに水筒に湯をつめてひとりで寂しく病み臥してゐるのを遠く思ひやつた歌である。これだけの自註では少し自分でも物足りないが今は致し方がない。

②　表現にも無駄がなくつゝましくてよいと佐藤君が云つてくれた。或は褒めすぎかも知れない。

③　結句の「此岸に及ぶ」といふあたり苦心したつもりでも先生の影響がたしかにあるのであらうと自分でも思ふ。私は以上屢〻云つた如く、丸の内の歌を實に多く作つてゐる。つまり自分の生活に卽して詠めばどうしてもさういふことになる。「高層建築群」などは今見れば何でもなく出來た句のやうであるが、歌にかういふ句を取り入れたのは當時までには誰のにも無かつた筈である。

昭和十五年

冬靄

1
冬靄は晝ちかくまで霽れゆかず翳(かげ)くらき高層建築の群

2
晝くらき靄退(そ)きゆきて事務室の机のうへのよわき日のかげ

3
冬はらを一人(ひとり)ゆくとき月(つき)の暈(かさ)まぢかく吾をはぐくむごとし

4
暗(くら)がりに我の求むる電球がおもはず近くありて手(て)に觸(ふ)る

5　枯草をわが刈り取りし庭隈（にはくま）にいくつか白き梅干の核（たね）

1　正面から手堅く行つていい効果を收めてゐる。

2　感情が出てゐる。かういふ著實な手法は即ち作者の力だと思ふ。

3　何か一歩出ようとする所がある。

5　右二首は偶然の中に面白味を感ずる事は出來るが、大して深いものではない。

①　この歌も次の歌もやはり僕の丸の内吟の一つである。自註は要らないと思ふから佐藤君の批評に據られたい。

③　この「冬はら」といふのは青山北町の自宅から青山南町の童馬山房へ行く途中、すなはち水上瀧太郎氏の屋敷を過ぎると童馬山房の手前の道の左右が原つぱになつてゐた。そこを夕食後ひとりで先生の家へしづかに歩いてゐるときに、あたかも月の暈がかかつてゐて、そこをかういふ風に感じて作つた。それであるからこの歌に對する佐藤君の批評は簡單でも有難いと思ふ。

④　この歌と次の歌は自分の家に於ける日常吟であるが、自分にはいくらか得意なところもあり、先生にもいいと云はれた歌である。この二首に對する佐藤君の批評に全面的には應じがたい。

海邊

1 この原に立つ砂埃とほくより見つつ來りてわれ近づきぬ

2 日沒ごろ海を吹くかぜ疾くなり飛行場の岸をこゆる白波

3 街上を氷蹴りつつ行きすぎし幼きころはすでに聞こえず

4 潮けぶり立てつつ風の吹きすぐる一月の海の沖くらみたり

5　空ひくく疾風(はやち)すぎつつ夕ぐれの光のこれりわたつみの雲

1　下句先生の歌にあるが、見てゐるところは矢張り作者のものだ。「この原」がもう少し特殊に現れてゐなければ物足らない。

4　見る眼が確かで整然としてゐる。

5　同然。

この一聯は、たしか雑誌「改造」から頼まれて作つたものである。當時私のごとき微々たる者に天下一流の「改造」から歌を求められたことに大いに感激し、却つて少しく固くなり過ぎた憾みがないではない。

冬

1 しみとほる冬の曉(あかつき)に目ざむれど乾(かわ)きし庭の土は凍(こほ)らず

2 雨降らぬ冬の空氣(くうき)は夏旱(なつひでり)よりもきびしと吾はおもへり

3 内濠の氷のうへに棲む鴨は睡(ねむ)りつらむか冬の夜ふけて

4 冬靄の沈める上(うへ)に赤羅(あからひき)て八層(はつそう)の厦屋(いへ)しばし昏(く)れのこる

5　利根川のほとりに行かば聞こえむか軋むがごとき霜夜雁が音

2　三四句は結局平凡だと思ふ。ここに一本筋金を通すべきだつた。

4　力量のある歌だと思ふ。悠々としてゐるところは讀んで氣持がいい。

5　形式的だが、惡くはない。技巧がうまい。

①　長く雨が降らなかつた爲に庭の土がすつかり乾ききつてしまつて、凍みとほるやうな冬の寒さにも凍らないところが私の注意を惹いたのである。

③　冬の夜がふけて、もうあの内濠の鴨も睡つただらうかと思ひやつた趣きになつてゐる歌である。自分はまだ起きて机に向ひながら鴨を眼前に彷彿させてゐるところである。なにがなし自分には懷しい作である。

④　この歌も亦自分の丸の内作品群のひとつであつて、骨を折つてゐるし一期を劃するものと思つてゐる。さういふ意味で佐藤君の批評をうれしく思ふ。

⑤　私は利根川附近へひとりで行きまた先生や佐藤君などとも行つたことが度々あつた。そして雁のたむろしてゐるところを見て歌にも作つた。單なる空想の歌ではない。

なほ、この一聯は自分でもさう出來が悪いとは思つてゐない。

寒靄

1 朝靄のあやしく暗き丸の内の鋪道の鳩ら羽ばたきて飛ぶ

2 わが前の鐵扉の内を貨物昇降機下りしとき男のこゑ聞こゆ

3 可動橋鎖すサイレンつづけざまに川を渡りし街に反響す

4 午後四時のラヂオのニュース終るころわが机に電氣スタンド點しつ

5　スキッチを押しつつ下る階の燈は一分たてばつぎつぎに消ゆ

1　いい。ただ調子「の」の連續が少し氣になる。

2　即物的な表現で調子も堅くていい。

3　これでは以前の反覆ではないか。新しい發見がない。

5　事實に即しすぎて餘裕がない。

⑤　僕の勤務してゐた馬場先門の八層のビルはあらゆる最新式の裝置が施されてゐた。そのあるものは歌集「杉原」に收めてある。この歌に詠んだところを註すれば、階段を夜業などして上下するときに各階毎にある電燈のスイッチを押して明りをつけて通る。その電燈は一分間たてば自然に消燈するやうな裝置になつてゐた。さういふところを一首に纏めたわけであるがやや分かりにくい點があるかも知れない。

春寒

1
日のひかりうつろふ頃は帚目(ははきめ)ののこれる庭のつち乾(かわ)きをり

2
洋傘(かさ)もちてわれの歩ける地下道に埃(ほこり)もみえず冬過ぎむとす

3
張りつめし濠の氷に降る煤(すす)は日比谷の角(かど)に吹きたまりつつ

4
日曜の晝すぐるまでひとむきに庭に炭(すみ)挽(ひ)く汗かきながら

5　噴水をいつか止めたる公園の二つの池のみづ涸れにけり

1　味ひが細かで大變いい。

2　人の行來の多い地下道故「埃も見えず」といふのは見方が淺い。偶〻人通がその時なかつたとしても。

3　實際を見てゐる點がいいと思ふ。これは大兄の長所だと思ふ。

4　これも大兄の別の特徴なり。

この一聯など自註も要らないやうに思ふし、佐藤君の批評が精しいから御參看ねがひたい。

早春

1
海のべの松のこぬれに春まだき巣ごもれる鵜はなべてかなしゐ

2
墓地の木をなびけ吹くかぜ疾からし兵營の灯の見えわたるまで

3
濠のへに氷は解けてみなみより吹きくる風の向かはるらし

4
霜降らぬ朝もありて庭の上のよごれ目にたつうらさびしかり

5　土の上に日の差す見れば擬寶珠の細根(ほそね)むらがりて生けるがごとし

6　くもり日の庭しづかなる午後となり斑(むら)がわきせる土も身に沁む

7　外套のかくしの中に手に觸れし粉山椒(こなさんせう)の小瓶(こびん)なるべし

8　わがくにの切符制度は如何ならむ形をとりて始むるらむか

1　下句は少し安易だつたと思ふ。
3　自然相をよく把握し得てゐる歌だと思ふ。
4　感心すべき一首。この歌では結句が弱いやうで實はいい効果をあげてゐる。
6　大變いい。四句「斑がわき」といふのでも苦辛があるし、上三句のつづき具合なども微妙

で味ひがある。又何よりも觀照が精到でかりそめでない。

この一聯も特に註を加へる必要がないやうに思ふから省略に從はう。

大島

1
外海のくもれる奥に利島見ゆかの氷山のうかべるごとく

2
磯山の椿の林はるの日はしろがねいろに照りてしづめり

3
おどろきの聲をあげたり照りひかる椿の樹海目のもとに見て

4
海を吹く風まともなる島の端磯のたひらに下り立ちにけり

5　榛原の芽ぶかむとする島山に一日し居れば鳥が音きこゆ

3　常識にして平凡ならん。

5　一般的で物足りない。

この一聯は勤務先の人々と共に大島へ行つたときの歌である。大島にはかつて佐藤君を誘つて二人で行つたことがあり、その作は前に出てゐる。この勤務先の人々と行つたときは私が世話役をやさられて種々まごついたりしたことを思出す。そしてこの大島から歸つて一週間ぐらゐ後に會社の專務取締役であつた阿部章藏氏卽ち三田派の作家水上瀧太郎氏が會社の女子社員の會で講演中腦溢血のために卒然として倒れ遂に再び起たれなかつたことを思出す。この歌とは別に關係ないことであるが自分の覺えのために書留めて置きたいと思ふ。

火口

1
燒砂の原のひとすみに光差し小さき襞の見ゆるこほしさ

2
火口丘の陰たつところ湯氣のぼり噴火口よりも凄じく見ゆ

3
沙漠なす火口高原をゆく駱駝天を仰ぎて鳴くこゑ寂し

4
火口より直ぐにつづきし平あり吐く氣しろし幾ところにも

5　内輪山にあまたむらがり來る鴉人を恐れぬさまに下りたつ

1　いいところを見てゐる。私は「見ゆることほしさ」と結論してゐるところが幾分物足りないとは思ふが。

3　素材平俗と思ふが如何。

4　確でいい。

この一聯はやはり大島行の時の作で發表誌が違ふために、前の「大島」の一聯は椿の樹海のある海岸地帶を主として作り、ここでは山上の火口を中心として作ったのであった。

ふくろふ

1
高槻の青葉がくりに啼くならむ梟のこゑ今宵はちかし

2
眼鏡はづして夕食をくふ暫くはいきどほろしき事を思はず

3
梟のしきりに啼きし夜は明けて庭に植ゑたる茄子を見にゆく

4
蓼の葉はくれなゐに透きとほりたり青萱むらに光さすとき

5　街なかの木立に啼ける梟のこゑ聞こえつつ寂しくねむる

1　順直で自然な一首だと思ふ。
2　作者の面目躍如。
5　捨てがたい情調がある。

①　青山北町六丁目の家に夜ふけて毎晩のごとく梟の啼くのが聞こえる。あの高槻にねて啼くのであらうが、今晩は大分近づいて來たやうであると云ふのである。

②　僕は學生の頃、長くつづけて本を讀んでゐると眼が痛くなるので、四谷信濃町の慶應病院眼科で診てもらつたところが、輕い亂視（正亂視）だから眼鏡をかけるやうにしたらよいと云はれた。それからずつと眼鏡をかけてゐた。多分夏は汗が流れて眼鏡がうるさいので食事をするとき眼鏡を外して食べたのであつただらう。佐藤君の評してくれた通り自分に卽したところがあれば幸ひである。なほ、この眼鏡は昭和二十年四月にふとしたことからこはしてしまひ作るのに一

箇月以上もかかつて代りの眼鏡が出來たが、それ以來眼鏡を用ゐずに今日に到つてゐる。

⑤　以上三首は大體梟を中心とした日常生活吟の一種に過ぎないし説明するところも無いやうに思ふ。

暗黑

1
暗黑の一劃に差すガレーヂの明りのなかを横ぎるわれは

2
木の芽だつかかる夜ごろを身に病もてる人々苦しからむか

3
みなみ風吹き來とはやもわが部屋のなべての建具音しはじめつ

4
參道の夜のくらがりを歩み居り十時すぐれば人は通らず

5 吹くかぜは外の面に音し間をおかず机のまへの障子うごけり

6 小路より表通が平かに見えつつ雨のこよひ明るし

7 庭の面にとどくばかりに花房は垂りつつ咲けり馬酔木ひともと

8 夕飯を終へて用無き妻よりも四時間あまり長く起き居り

1 新しくて而も完成してゐる。梶井基次郎の小説に同様の情景があつて、或る不氣味な感情を出してゐるが、この歌はこれで又いい。

2 先生の歌を反譯したやうな一首で、作者の手柄といふものがない。

3 「なべての建具」は落着がないだらう。

5　或る程度現し得てゐる。斯る表現の力といふものを私達は先生から學んだ。力が成熟してから歌壇に出たといふ事はお互に幸福だつたと思ふ。

6　無理のない一首で好感が持てる。特殊性はやや足りないが、堅實なので安易といふのではない。

7　どこか生きてゐる。四句あたりがうまい。

①　佐藤君の批評が大變精しく同情的である。それに據つていただきたい。

②　やはり先生の歌の影響が沁み込んでゐるのであらうがこれは致し方のないことである。

④　この時分でも夜の十時をすぎるとあの表參道の廣い通りを通る人はごく稀であつた。僕は多分童馬山房から夜ふけて歸るところであつただらう。

⑤　この歌は3の歌と同じ時の歌で颱風襲來の夜の一情景を寫したものである。やはり先生から學んだところが多いであらう。

⑧　私は勤から歸つて夕食を濟ませると健康なるに委せて毎晩夜更くるまで種々の爲事をして

ねた。毎晩のやうに妻よりも四時間以上も餘計に起きてゐたわけで、ただそれだけの歌であるだらう。

椎の花

1 牡丹の葉かく茂りゐてあかときのさ霧のごとき雨にかたむく

2 ほのぼのと香にたちて咲く椎の花ゆふべ目につく白き花群

3 くれなゐの莖ならび立ち虎耳草はな咲きそめぬあな慌し

4 山薊の花いで入りて日もすがらまつはる蟲は埃のごとし

5　小包の紐の斷片を入れ置ける抽出をわれ幾たびも明く

1　「かたむく」と言つた意圖がはつきりしない。措辭巧妙なれど力なし。

2　「ほのぼのと香にたち」といふ感受は贊成出來ない。つまり對象の知覺が確かでないやうに思ふ。

3　「あな慌し」が生きてゐない。必然性がない。

4　著實でいい。

①　庭に二株の牡丹があつて毎年四月二十九日の天長節ごろ必ず花が咲き雜草ばかり植ゑてゐた私の庭にあつては唯一の華かな存在であつた。これも多分土屋氏にいただいたものだつた筈である。牡丹の木はなかなか太らないもので、葉が實に大きく繁る。ただでさへ葉の重みに堪へかねるやうな始末であるのに霧のやうな雨がかかつて木ごとかたむいてゐるところを見たものでやや輕いかも知れない。

②　椎の木も少年のころ鄕里に在つたころから好きな木の一種であつて、この花の匂ひも嫌ひ

ではなかつた。この歌は出來が悪いがさういふ訣で椎の木に愛著があつて現在までにいくつか椎の歌を作つてゐるが、これもその一つである。

③　これも庭前卽事のひとつで出來はよくない。ただこの虎耳草はやはり自分の幼い頃から鄕里の家のそばの石垣に一面にあつて可憐な花を咲かせてゐた。それを歸省したときに幾株か採つて來て庭に植ゑたのが年々咲くのである。

⑤　僕は割合に物の始末がよい方であつて、短い小包の紐の斷片でも一々これを小さく結んで幾つも机の中に入れてゐる。つまり物事を無駄にしない性質があるのであらうか。机の抽出には小包の紐だけ入つてゐるわけではないが、抽出をあける度にこれが目に著くので、これを代表せしめた具合である。

退け時

1 丸の内通しづかに夕昏れてわが前ををとめ等幾組も過ぎつ

2 勤退けて歩ける衢の宵闇にマンホールの蓋閉づる音せり

3 おもおもと花さく椎の一群は日比谷公園の池の北がは

4 鋪裝せる公園のなかの白き道花壇に入りて二分れせり

5　鋪道しろく昏れのこるころ公園をひとり歩きぬつとめ退け來て

6　砂糖いれし玻璃の器に蠅ひとつ入りゐて暫し心いらだたし

7　夏のよる更けそめしころ青山の我家まぢかく啼くほととぎす

2　單なる偶然でかういふ現象には力がないのが欠點だと思ふ。

3　上句には現實を現はす苦辛がある。

4　そつがなく、あぶなげが無い。然しやや淺い。

6　小記錄といふ感じ。

①　またかと思はれる程丸の内の歌が出て來る。しかし一日の大部分を丸の内に過してゐて、

丸の内の歌が出來なければその方が餘程どうかしてゐるかも知れない。1から5までは退け時の歌で馬場先門から日比谷へ歩き日比谷公園へ入つて散策したときのものである。つまり佐藤君の云ふ通り私の生活の小記錄の一端に過ぎまい。

七月

1 風速は十メートルを超ゆるらし畫のちまたを行く雲ひとつ

2 雀らのこゑの聞こゆる夕ぐれは水のごとくに空澄みゆきぬ

3 指さきに力をこめて針金を曲げ居るときはものも思はず

4 冷房のききたる室に暫しして體むづがゆく覺えつつ居り

1　これだけの素材をもつと重く扱ふ事が出來たらと思ふ　悪い歌ではないが。

2　「水のごとくに」はやや平凡と思ふ。

①　この一聯も小記錄の一つに過ぎず出來もよくないであらう。かういふ處にぐづついてゐた自分を齒がゆく思ふが、今更致し方がない。

④　最新式の裝置のビルに勤めてゐたから、夏は全館冷房裝置をしてゐた。冷房がよく利いてゐるので、體がむづがゆいやうな具合である。しかし一日冷房裝置の中にゐると、馴れてしまつてさう涼しくも感じないものであるが、一たび勤を退けて館外に出て急に外の溫氣に觸れるとあたかも蒸風呂にでもはひつたやうな感じがしいしいした。

夏雲

1 晝の明りすでに無くなりて稻光(いなびかり)する遠ぐもは秩父あたりか

2 幾たびも爲事(しごと)のひまに腹卷の下にたまりし汗を拭きたり

3 さみだれのしぶき降るとき蟻地獄こもれる土もくろく濕りぬ

4 蚊帳(かや)のなかに曉はやく目ざめ居り隣の部屋を妻の掃(は)くおと

5 眼下の街の灯きえて八階の夜業する室に入りくる蚊のむれ

6 夜業するこの室の人をおそふ蚊は濠より直ぐに飛びくるらむか

7 龍の髭のかすかなる花さきそめぬ梅雨終りたる暑き日照に

1 結句は客觀的でない。若し作者が自宅か、東京市内にゐるとしたら、秩父のやうな遠い雲は視界に入らないと思ふが如何。

3 しみじみとしていい處がある。

4 どこか物足りない所がある。作者は何を感じてゐるのか分らない。

7 見方が淺い。

① 佐藤君は作者たる私が自宅か東京市内にゐるとしたら秩父のやうな遠い雲は視界に入らないと思ふが如何と云ふ。佐藤君、この歌は君と僕と二人が先生に從つて夕方近くから神宮外苑の神宮プールへ水泳競技を見に行つた時の歌なんだよ。その時に遠くの雲が稻光したのを僕は見たのだ。それでその稻光する遠い雲は秩父あたりであらうかと云ふのである。

⑥ この歌と5の歌は會社で夜業してゐるときのものである。冷房裝置も四時ごろ停めてしまふから、暫くすると窓を明けて風を通した方が涼しいのである。ところが窓をあけると八階の夜業してゐる部屋まで蚊が襲つて來る。多分濠に群れてゐる蚊が直ちにこの明るい部屋を目がけて飛んで來るのであらうといふところに作者は興味を覺えてゐるわけである。

八月

1
八月のひかり澄みつつ寂しきまで甍のうへの影濃くなりぬ

2
わが前にとまりし自動昇降機の鐵扉たたまり開くおもき音

3
濠のみづ蒼くしづまり夏のあさ鵜ひとつ來をり見るとしもなく

4
金線草車前草鴨跖草蓼の花みな一ときに咲きて目だたず

1　一應これでいいが、四五句だけでは未だ作者の見たところは出きつてゐないと思はれる。

2　佳。これだけの整理はなかなか出來難い。

4　面白い。結句が生きてゐる。

①　初め三首はこれ亦丸の内の歌である。この歌なども實際を見てゐるのであるが見たところが出きつてゐないであらう。力が足りないためである。

②　私の勤めてゐたビルにはエレベーターが幾個所にもあり、また貨物專用の大きいのもあつた。ここに詠んだのはそれ以外の小型のもので、地下二階から三階までの間を上下して居り、それはエレベーターガールが乘つてゐない。社員がボタンを押すとエレベーターが今まで止つてゐた階からひとりでにその前へ來て鐵扉がたたまり開くのである。この自動昇降機はことに最新式のもので色々説明すると面白いのであるがこのくらゐでよしておかう。

③　前にも云つたやうに鵜が好きな自分は濠に來る鵜にも少からぬ愛著を持つて見るのが常であつた。この歌と關係はないが、ある時濠水の中から水面に浮んだ鵜を見ると大きな鰻を横に

銜へてゐたことがあつた。これをどうして呑むかと思つてしばらく見てゐたが鰻が大きくて鵜もてあましてゐた。鵜は首を何回も横に振つたり、また水に潜りもして鰻を次第に弱らせ、始め鰻の眞中ほどを銜へてゐたのが段々頭の方へ位置を變へて行き、遂にこの大鰻のぴちぴち跳ねるのを頭から呑んでしまつた。自分はほつと一息ついてまた歩みを進めたことを忘れ得ない。

新秋

1
秋晝の睡眠(ねむり)さめつつ廂間(ひあはひ)のそらを見てをり段(きだ)なせる雲

2
海外ニュースの如く聞きをり帝劇に情報局の移ると言ふを

3
秋の雨はげしかりしが街上のところどころに砂たまりたる

4
電氣スタンドめぐりて鱗粉(りんぷん)とばす蛾を憤りつつ見てゐる吾は

1　「段なせる雲」は先生の歌にあつたと思ふ。先生の影響は作者にとつて全く身についてしまつてゐる。いい意味でも悪い意味でも。上句は調子が浅いと思ふが如何。

3　やや外形的な把握が物足りない。見てゐる所はいいが。

4　平面的な感受なり。

①　佐藤君の批評を參看せられたい。

②　當時、内閣の情報局が丸の内の帝國劇場に移轉するといふことを新聞で見て、自分は官憲と云ふか軍閥と云ふか、さういふものの力が段々加重されつつあつて、帝劇のやうな文化施設を占有するやうなところを快く思はなかつた。「海外ニュースの如く」と云ふのはあたかもドイツあたりの出來事をでも聞くやうな思ひであつたと云ふので、さういふ忿懣に堪へない氣持を云ひ表したものである。僕の心持は斯くのごときであつたのである。

餘響

1　颱風の餘響(よきやう)ならむと思ひつつ對(むか)ふ庭草(にはくさ)向(むき)さだまらず

2　秋雨(あきさめ)のけむるが如き街上のやや明るみし方を見てをり

3　眼鏡かけしことを忘れて思ふまで秋のはじめの一日(ひとひ)やすけく

1　把握が確實でしかも表現が渾然としてゐていい。一首の姿が清潔なのは作者の特色である。

① 自註もいよいよ進捗してまさに終らむとする。この「餘響」一聯も歌集「赤土」の最後に据ゑたのはこれも自然の結果であつたが、一つには「赤土」はこれで終つてもその餘響をのこしたいといふやうなつもりもあつたのである。この歌佐藤君も全面的に贊成してくれて感謝する。僕もこの一聯は相當骨折つたのであつたから特に嬉しく感じるわけである。

② これも街上矚目にして、寫生の歌である。「やや明るみし方を見てをり」は期せずして象徵の味ひがあると云つてくれた友もある。

③ 秋は僕の最も好む時候であつて、この歌にはさういふ秋の一日の、靜かな私の氣持がにじみ出てゐると云つても云ひ過ぎであるとは思はない。やはり自分のものである。

評後に

どの歌も實に確かで手堅いし、先生の觀入、表現を體得して自分のものとして、新しい自分の境地を形成してゐる。又一面からいへば「赤土」に較べれば大兄の現在の歌境には非常な躍進があると思ふ。これは至極當然の事で、ここにあるのは十年も以前の作者だから、今日から見れば、私の「歩道」にしても同じで、若いところがある。然し「赤土」にはもう再び歸る事の出來ない良い數々がある。それを私は追懷しつつ讀んだ。何にしても大兄は全く育ちきつて歌壇に出たといふ事を感じた。

昭和二十二年十月一日讀了

妄評萬謝々々

佐藤佐太郎

互評自註歌集「赤土」後記

ここに私は書肆との約束により、わが友佐藤佐太郎君の評してくれた自著歌集「赤土」に辛うじて自註を加へることをした。私の歌は謂はば自註を要するやうなむづかしい歌も無く、ひねくつた歌もなく、初學者にも一應は分かるやうな作が多いのである。これまで私の歌を評する人は多く類型的な評言として、「著實である」「手堅い歌である」などと云つて呉れた。私はこれを好意に解釋しようとするものである。著實とは實に著くことである。即ち事實に即することである。これ即ち寫生の實行をつきつめたものでは無いか。僕の歌は出來が悪くとも念々寫生を實行したものである。即ち著實である訣である。また著實には「落著いて忠實であり、また、かろがろしからず深切である」と謂ふ意味もある。私の歌及び私自身はさういふ人間である。手堅いと謂ふのは輕薄・輕浮の反對である。輕薄・輕浮であるよりも堅實の方がよいことは誰でも分かるであらう。この頃の歌壇を見渡すと輕薄な歌人が少なからず、見るに堪へない思ひがする場合が實に多くある。自註は即ち自讃であつてもよいであらう。けれども、私の歌は自分ひとりでここまで

來たものとは思つてゐない。アララギ諸先進のお蔭を蒙つてゐるのであり、また齋藤先生の常に渝らない御教へと導きに賴つてここまで來たものである。私はこれ等の人々に深い感謝をしなければならない。

なほ「赤土」に書いていただいた齋藤先生の序文を左に再錄して永く記念とし、自分の怠りを戒めねばならぬ。

序

山口茂吉君の新歌集「赤土」もいよいよ發行になることになつて、私の歡びも一入であるが、聞けば頁數の關係で昭和十一年以降の歌を纏めることになつたといふことである。昭和十一年といへばつい近くで、山口君は既にひとかどの歌人として歌壇が容した頃であるから、却つてその方がいいとも思ふが、それ以前の作をも顧みたいといふのが、ひそかに私も念つてゐたことであつた。

私は大正十四年の一月に、歐羅巴の留學から火難に遭つた家に歸つて來た。燒殘りの家に歸つて來て、風呂場に當ててあつた狹い處を書齋がはりにして、隨筆などを書いては書籍を

買ふ料の足しにし、病院復興に日夜心を勞してゐた頃である。アララギ會員になつてまだ間もない山口君は、私を慕うて訪ねて來ては、作歌のうへの相談をしたのである。その頃常に氣の立つてゐた私は君の作歌に對しても溫辭豐和といふ訣には行かなかつた。恣に削り去る歌を、君は惜しさうな面持で見てゐたことが實に幾たびであつただらうか。

然るに君との關係は單に歌のみにとどまつてゐなかつた。君は私の辛苦をいたはり、何くれとなく私に助力した。その頃重刻した私の「童馬漫語」といふのに誤植が稍多かつたのを君は憐んで、その後に出した「金槐集私鈔」の校正の如きは、私のために君はただ一人で遂行して呉れたのであつた。その頃君は未だ獨身であつたが、私の近邊に移つて來たり、一家を持つやうになつてからも、不便を忍びつつ私の近くに借家して、私の爲事のためにその助力を惜しまぬのである。爾後約二十年に近く、君が私のために費したその勢力と時間とは、一言にしてはこれを盡されぬ程である。然かも君は恬然としてその勤勞を顧みない。或は氣づかぬのではなからうかとさへ思へる程である。

斯くの如くにして歲月が經つたが、今や本邦の歌壇は君を目して、優秀なる新進の一人として迎ふるに至つた。刹那より刹那を送つてゐた私が、斯くのごときことをはじめから豫期

したであつただらうか。私は先師歿後のアララギを守るに際し、同志と共に協同の働きを目差したのであるが、今やアララギの圏内から君の如き歌人を歌壇に送るといふことは歎ばざらんと欲しても能はざるところである。これは敢て私を敬慕したといふ如き私情を遙かに超えた感情でなければならぬ。

山口君の歌風は、はじめより地味で手堅く餘り人目を牽くといふ風のものではなかつた。目ざましき飛躍をばいつも續けて來たとは謂はれぬものであつた。然るに質實不動の君の行爲は、飽くまで子規以來の傳統に據つて、現實に觀入することを怠らず、いつしか子規・左千夫時代にもなかつたこの新風を爲し遂ぐるに至つた。私は廣く眼を放つて歌壇と共にこれを歎ばねばならぬ。

私もやうやく老い、友の新集に一言を徵せられしに當りて、おのづから懷古的感慨を漏らすまでになつた。けれども、向後私の發展の既に疑はしきと異り、友は年未だ若く、後生畏るべしである。願はくはこの新集を門出とし將來の進歩をして不斷ならしめよ。以て序とす。

昭和庚辰新秋吉日

齋藤茂吉

なほ、歌集「赤土」は墨水書房から發行したもので初版は昭和十六年一月一日、再版は同年二月二十五日三版は同じく三月十五日及び第四版は十八年九月九日に發行になつたものであるが、今は版が絶えてゐる。

なほ、本書の上梓を慫慂せられた鹿兒島壽藏氏、互評者として同情ある批評をしてくれた佐藤佐太郎君に對し深く感謝の意を表する次第である。

以上簡單ながらこれを以て後記とする。

昭和二十二年十二月一日

東京麻布市兵衞町一ノ三の自宅にて　山口茂吉